

Keio

Research

Center

for

the

Liberal

Arts

慶應義塾大学  
教養研究センター

2019 年度  
活動報告書

---

# 2019年度 活動報告書

---

慶應義塾大学教養研究センター  
Keio Research Center for the Liberal Arts

# は じ め に

慶應義塾大学教養研究センター所長 小菅隼人

2019年度の活動報告書をお届けします。「令和」は、2019年5月1日から始まりましたので、令和最初の活動報告書ということになります。

詳しくは各項目に譲りますが、2019年度の特筆すべき新しい活動として、新たに株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座「日吉学」が開講したことがあります。これは不破有理教授の長年にわたる綿密な計画と教養教育にかける熱意が生み出した成果です。最終回には、襟川陽一社長（塾員）をお招きして、研究発表会を行いました。また、全国から問い合わせのある、アカデミック・スキルズ10分講義ビデオの改訂も進め、6本を取録することができました。次のタイトルはいずれも、教養研究センターのホームページ中のアカデミック・スキルズから見つけることができますので、視聴していただければ幸いです——「研究とは何か？」（小菅隼人）、「文献を読む」（片山杜秀）、「レポートの問いの立て方」（鈴木亮子）、「剽窃について」（池田真弓）、「翻訳について」（高橋宣也）、「効率的に情報を探すには」（竹田咲子）。2020年度は9本を追加し、さらに、充実させていきたいと思っています。庄内セミナーの紹介ビデオも改訂しました。教養研究センターは、新たな取り組みと、これまでの積み重ねをアップデートしていく活動を並行して行っています。

2019年度の最後の仕上げと2020年度への取り組みを構築している最中の2020年2月に、世界的規模の新型コロナウイルス感染症の大流行が起きました。それに伴い、慶應義塾大学も卒業式が中止、入学式が延期となり、新学期の授業は4月30日から原則としてオンラインで行われることになりました。4月7日には、「改正新型インフルエンザ等対策特別措置法」に基づく緊急事態宣言が、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、および福岡県に発令され、4月16日には全国に拡大されました。大学のみならず、劇場、博物館、映画館など教養研究・教養教育に深く関係する施設も閉鎖を余儀なくされています。

しかし私たちは、教養の灯を消してはなりません。その決意を内外に示すために、教養研究センターは、次のようなマニフェストを公開しました。

## 新型コロナウイルス感染症流行にあたっての教養研究センターの姿勢について

2020年初頭からはじまった新型コロナウイルス感染症の流行によって、慶應義塾大学は、卒業式の中  
止、入学式の延期を始め、学事日程の大幅な変更を余儀なくされました。学生、教職員が一つの場所に集  
まって膝を突き合わせて共に学ぶ場を「塾」と呼ぶとすれば、人が集まるのが制限される昨今の状況は  
研究教育機関としての慶應義塾にとって最大の試練と言えます。

教養研究センターも、慶應義塾大学設置の諸研究所の一つとして、福澤諭吉の慶應義塾開学の理念のも  
と、教養を核としたさまざまな研究・教育活動を行ってきました。特に、当センターは、開所当時から  
「身体知」というコンセプトを掲げ、心と頭と体を総合し、学生、教員、社会人が共に学ぶ直接的な教養の  
方法を模索してきました。教養研究センターも大きな試練に直面しています。

この状況を踏まえて、教養研究センターは、慶應義塾の方針のもと、学生の安全と健康に最大限の注意  
を払いつつも、教養研究センターの使命を見失うことなく、研究教育機関としての社会的責任を果たして  
いく所存です。設置科目の一部休講、当初の予定を変更しオンラインによる教育形態への切り替えを余儀  
なくされつつも、教養研究センターは、この状況をただ受動的に耐え忍ぶばかりでなく、むしろ、一つの  
機会ととらえ、新しい教養研究・教養教育の方法を模索していきたいと思えます。

「教養」は、不要不急なものではなく、人間にとって絶対的に必要であり、生きていく上でなくてはなら  
ないものです。いかなる逆境にあっても教養の灯を消してなりません。そのような決意でこの状況に臨ん  
でまいりますので、日頃、教養研究センターの活動にご理解をいただいている皆様が変わらぬご支援をな  
にとぞお願いいたします。また、提言がありましたら是非とも教養研究センターにお寄せください。

2020年4月1日

教養研究センター所長 小菅 隼人  
副所長 片山 杜秀  
副所長 高橋 宣也  
副所長 荒金 直人  
副所長 瀧本佳容子

それにしても、この新型コロナウイルス感染症はいつ終息するのでしょうか？ 終息後の世界は果た  
してどう変わっているのでしょうか？ その時のためにも、今の時間をしっかりと教養研究のために、  
そして、キャンパスが再開された時の教養教育の準備のために使いたいと思っています。

教養研究センターの全ての活動はこの報告書に示されています。そして、忘れてはならないのは、こ  
の厳しい状況にあっても、極東証券株式会社様、株式会社白寿生科学研究所様、株式会社コーエーテク  
モホールディングス様、鶴岡市、致道博物館など大学外部からの様々なご支援を受けて研究教育活動が  
展開できているという事実です。そのご期待に背くことがないように、我々所員・教職員で精一杯努力  
する所存ですので、何卒今後ともご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

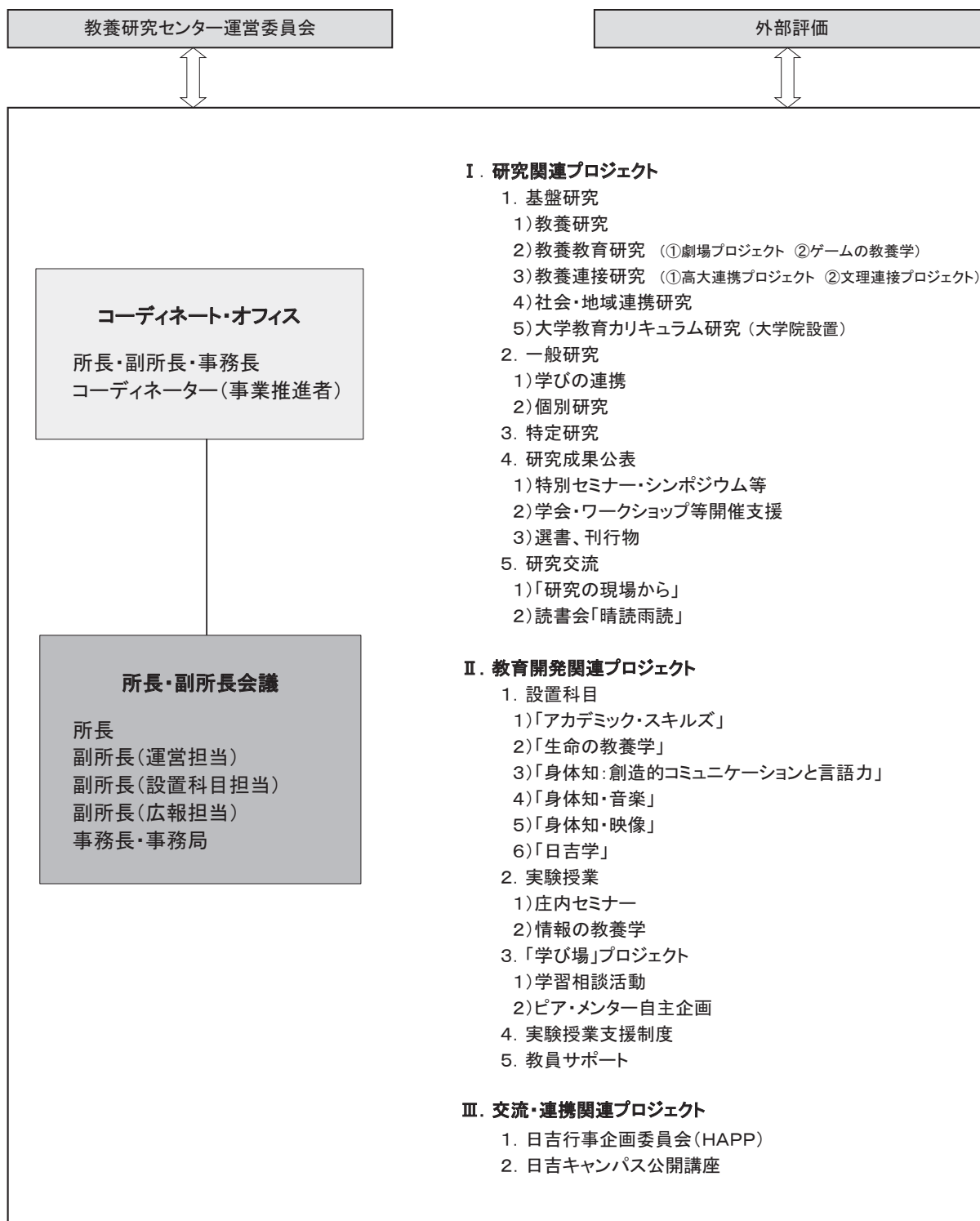
# 目 次

はじめに	3
組織構成と事業計画	6
2019年度事業報告	7
広報・発信	10
<b>I 研究関連プロジェクト</b>	
基盤研究・一般研究・特定研究	12
研究成果公表	
学会・ワークショップ等開催支援	17
研究交流	
研究の現場から	18
読書会推進企画「晴読雨読」	19
<b>II 教育開発関連プロジェクト</b>	
1 設置科目	
1-1 アカデミック・スキルズ	21
1-2 生命の教養学—生命の経済（エコノミー）	22
1-3 身体知—創造的コミュニケーションと言語力	23
1-4 身体知・音楽	25
1-5 日吉学—「日吉学」正規科目としての出発	26
2 実験授業	
2-1 庄内セミナー	27
2-2 情報の教養学	29
3 「学び場」プロジェクト	31
4 実験授業支援制度	
4-1 機械（マシン）と学ぶくずし字—はじめの一步	32
4-2 フランス事情 I 「フランスとアフリカ」	33
<b>III 交流・連携関連プロジェクト</b>	
1 日吉行事企画委員会（HAPP）	34
2 日吉キャンパス公開講座	36
3 「創造力とコミュニティ」研究会	38
<b>資料編</b>	
1 慶應義塾大学教養研究センター規程	40
2 運営委員会委員	42
3 組織構成員	43
4 2019年度の主な活動記録	45

※本報告書では、各プロジェクトを便宜上3つのカテゴリーのいずれかに分類しました。

※所属・職位は授業、イベント等開催当時のものです。

## 教養研究センター組織構成と事業計画(2019年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

詳しい報告は各項目に譲るとして、ここでは、当初計画による形式上の分類に捉われず、内容から全体を概観して、研究活動、設置科目、啓蒙・サポート活動、地域連携活動として概要を述べる。

## 1 研究活動について

- A) 2019 年度も前年度同様「大学教育カリキュラム研究」については特段の研究活動はない。しかし、日吉のカリキュラム作成において大きな改革ポイントとなった日吉カリキュラム検討委員会の設置は、教養研究センターの基盤研究の一つの成果であり、大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、今後も教養研究センターの事業として設置する予定である。経済学部 Pearl や GIC が進む中、今後、グローバル化とカリキュラムの関係を集中的に考えなければならぬ時期が来ることが予想される。
- B) 2019 年度基盤研究「教養研究」の講演会は、元アート・センター所長の鷺見洋一名誉教授と森美術館の前館長南條史生先生によって行われた。鷺見先生の講演では 40 名、南條先生の講演会では 160 名の参加者を集め、教養としての美術への興味の深さと広さを感じさせた。シンポジウムは、新型コロナウイルス感染症流行の影響で行うことが出来なかった。年 2 回の講演会、年 1 回のシンポジウムを「リズム」として継続させていきたいと考えている。
- C) 「教養教育研究」において、「ゲームの教養学」のプランが完成し、寄附講座として成立することが確認された。今後、実験授業としての試行錯誤を経て、2 年後の開講を目指している。
- D) 「高大連携プロジェクト（教養の一貫教育）」において、教養を軸とした高校と大学の連携が本格的に始動した。このプロジェクトでは、慶應義塾高校の合意を得て、日吉協育ホールにおいて 3 回の講演会・ワークショップが行われた。
- E) 「文理接続プロジェクト」は、鈴木晃仁教授、荒金直人副所長を中心に基本的プランを練り、非常に充実した内容をもった 6 回の研究会が行われた。参加者への広報が課題であることも確認された。
- F) 「社会・地域連携研究」については、横山千晶

教授によるコミュニティ研究が主たる成果である。コロナ危機によって分断された社会において新しいコミュニティの研究は、喫緊の課題である。今後のさらなる展開が望まれる。

## 2 設置科目について

- A) 「アカデミック・スキルズ」：教養研究センターの教育活動の中で、最も大きな位置を占める「アカデミック・スキルズ」は、前年度同様、「アカデミック・スキルズⅠ、Ⅱ」が開講された。また、学生主体の「プレゼンテーション・コンペティション」と「論文コンペティション」も実施され、さらにこの授業の充実化がはかられた。「アカデミック・スキルズ（英語）Ⅰ、Ⅱ」については、一時、受講者に減少がみられたが、持ち直す傾向がみられ、今後の注視すべき課題とすることが確認された。
- B) 「生命の教養学」：「生命の経済」を 2019 年度のテーマに、オムニバス講義が行われた。生命の営みを教養という観点から再検討する講座となった。2019 年度の履修者は 78 名、内訳は理工学部 39 名、商学部 12 名、経済学部 10 名、薬学部 8 名、文学部 5 名、法学部 3 名、医学部 1 名で、日吉に集う全学部の学生の参加を得ることができた。活気あふれる各回の質疑応答と最終日の全体討論の様子から察するに、多くの学生が学際的な知の醍醐味に触れてくれた。なお、本授業の講義録『生命の教養学 16 / 生命の経済』が慶應義塾大学出版会より 2020 年 6 月に刊行された。
- C) 「身体知」：2019 年度は、横山千晶教授を担当講師として、2019 年 8 月 12 日から 17 日までの集中講座が開催された。通信教育課程から 14 名の参加があり、通学生 7 名と共に、合計 21 名の参加者を迎えた。今回は「自己と他者」をテーマに、4 作品が素材として選ばれた。フルース・イアソン作の「アパラチアン・トレイル」、偏見を白人と黒人双方の視点から描いたラリー・フレンチ作の「ミスター・マムスフォード」。ある事件を客観的に描きながらも異なる人々の経験を並列させたハナ・ボトミー作の「海流」、そして、移民と言葉と経験の問題を美しい文体でつづったジュリア・アルバレス作の「スノウ（雪）」である。終了後のことになるが、アメリカでの人種をめぐる暴動など、

差別の問題が、人間社会の重要課題であることが改めて認識され、時宜をえた企画となった。

D)「身体知・音楽」:「身体知・音楽Ⅰ、Ⅱ」は、教養教育の一環として音楽芸術の良き理解者を未来社会に派遣することを目指している。2018年度より株式会社白寿生化学研究所寄附講座としての運営となった。音楽大学以外で、実践をも含めたこれ程充実した音楽教育を行っている大学は他に無いのではないかと自負している。音楽を通して教養教育のさらなる展開が期待される。2019年度においては従来通り2つの授業が開講された。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」(器楽クラス)であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」(声楽クラス)である。前者は、17世紀および18世紀の音楽に焦点を当て、後者は、17世紀から21世紀までと幅広い音楽を扱った。また、2019年度は、3年に一度というペースで実施してきているオペラプロジェクトを行う年に当たり、器楽クラスおよび声楽クラスを履修している学生の中から希望者が任意でプロジェクトに加わった。

E)「日吉学」:2013年に実験授業として始まった「日吉学」は、長い試行錯誤の実験授業の期間を経て、株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座として正規科目となった。その初年度である2019年は秋学期に180分7回の集中講座として開講された。2019年12月3日に最終発表会を開催し、襟川陽一社長と浅野健二郎専務から論文部門とプレゼンテーション部門それぞれに優秀賞が授与された。学生からは「「驚き」を「学問」に変えていく授業」、「学部学年問わず幅広い学生が深め合う刺激的な場」、「フィールドワークを通して資料を読んでもわからないことに気づき、学ぶ=読むだけではないと全身で理解した」などの嬉しい声が寄せられた。

### 3 啓蒙・サポート活動について

A)「日吉キャンパス公開講座」:慶應義塾の知を広く社会に公開する、日吉における代表的活動としてこの講座がある。主として一般を対象とした有料の公開講座である。前身の「横浜市民大学講座」から数え46回目を迎えた2019年度「日吉キャンパス公開講座」を9月28日から

11月30日の日程で開催した。2019年度のテーマについては、4月9日に実施した公開講座運営委員会において、寺沢和洋委員長の提案を元とした「出口戦略とその先の未来」に決定し、講師陣については委員長提示の素案を元に、委員からも多数の提案があり、委員会として候補者リストを作成し、多彩な講師と402名の参加者を得て講演会が行われた。

B)「情報の教養学」:主として学生を対象として、教職員・一般にも開いた講座である。2019年度は前年同様、「情報とリスク」をテーマとして、講演会を6回実施した。各回とも聴衆が熱心に講演者の話を聞き、質疑討論も活発に行われた。特に、秋学期は、情報に関わる技術に注目した講演3件を開催したが、理工学部との共催でGoogle 合同会社のソフトウェアエンジニアがエンジニア職の紹介を通して、ソフトウェア開発に関わる様々な話題を講演した。ほとんどの講演はYouTube上で公開されている。

C)「学習相談」:本年度も、日吉メディアセンターとの共催で行われた。学生を対象として、日吉メディアセンターと共同で行われているこの事業は、学生が自ら教えることで学ぶ「半学半教」の精神に基づき、教職員のサポートによって学生主体で行われている。慶應独自の学びの形を実践する事業として、また、「教養の方法」を模索する企画として、意義あるものと考えている。

D)「研究の現場から」 「学会・ワークショップ等開催支援」:教養研究センターは、教職員を対象として、日吉キャンパスでの研究教育活動を活性化する様々な支援活動を行っている。これは、当センターが支援することで所謂「ハブ」となって教職員を繋ぎ、教養の基礎概念である「多様性」のあり方を実現・模索するための試みである。詳しくは本文に譲るが、今後も継続させたい事業であると考えている。

E)「読書会」:2019年度は、工藤多香子准教授を中心にハンナ・アレントの『人間の条件』が行われた。また、教養研究センターからの提案によって、片山杜秀教授によって丸山眞男『日本政治思想史研究』が行われた。これはいずれも、日吉キャンパスにおける読書会開催を促進



することで教員の研究交流の機会を増やすとともに、学生を含めた日吉キャンパス全体の読書習慣の活性化をはかる、教員支援プログラムである。さらなる活性化が期待される事業である。

#### 4 地域連携活動について

A) 「庄内セミナー」：教養研究センターでは山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパスを拠点として2008年以來、庄内セミナーを開催してきた。2014年度に未来先導基金としての活動が終了し、2015年度からは、新たに經常予算を計上して実施された。この事業では、地域と大学が一体になって学生を教育し、新たな教育方法として一つのモデルとなることが期待されるが、その意味では、単なる地域連携・交流活動ではなく、また単なる教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられ

ると考えている。2019年度、鈴木亮子教授を実行委員長として開催された。プログラムを組みなおし、松ヶ岡本陣からセミナーを開始した。天候が心配されたが、スタッフが適切に対応して、全員揃って無事全行程を終えた。終了後、活動報告書が作成され、関係各所に配布された。

B) 日吉行事企画委員会（HAPP）：2019年度、前年の形式を引き継ぎ、新たな内容で展開された。1990年代にはじまった入学歓迎行事は、日吉の各教員、職員、学生を繋ぎ、学部教育からこぼれ落ちた知を結びつける活動の受け皿として、その後、日吉行事企画委員会となり、今日の教養研究センターの一つのルーツとなった。具体的には、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。

（小菅隼人）

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブページを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。

また、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れている。2019年度の刊行物は以下の通りである。

## 1. 極東証券寄附講座

### 【生命の教養学】

オムニバス講義「生命の教養学」では、講座の内容を書籍にまとめて出版している。

■荒金直人編『生命の教養学 15 組織としての生命』  
2019年4月25日刊行

2018年度の講座について、11本の論考を掲載した。総頁数227ページ。

■赤江雄一・高橋宣也編『生命の教養学 14 感染』  
2019年9月30日刊行

2017年度の講座について、11本の論考を掲載した。総頁数292ページ。

### 【アカデミック・スキルズ】

■『2019年度アカデミック・スキルズ学生論文集』  
2020年3月31日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、一年かけて学生が論文を完成させる。これを学生自身が編集し、論文集として2004年度より毎年刊行している。本年度は諸学部1、2年生の論文36本を、講評とともに掲載した。

## 2. 教養研究センター選書

■石川学『教養研究センター選書 20 理性という狂気——G・バタイユから現代世界の倫理へ』  
2020年3月31日刊行

センターでは、研究の前線を一般の方々にもわかりやすい形で紹介することを趣旨として、選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、査読選考を経て刊行を決定している。2019年度は1作が刊行された。

## 3. CLA アーカイブズ

■CLA アーカイブズ 36

『基盤研究「教養研究」講演記録集 2017年度・2018年度』 2019年9月30日刊行

センターでは、2017年度より新機軸として「教養研究」という研究講演会のシリーズを開始した。その最初の記録集として、2017、2018年度の講演会、シンポジウム計6回を記録している。

## 4. 報告書

■『教養研究センター 2018年度活動報告書』

2019年8月31日刊行

■『2019年度 第10回「庄内セミナー」報告書』

2020年1月20日刊行

## 5. 教養研究センターパンフレット

■2019年4月1日刊行

センターを総合的に紹介するパンフレット。2017年以來の改訂を行った。

## 6. Newsletter (ニューズレター)

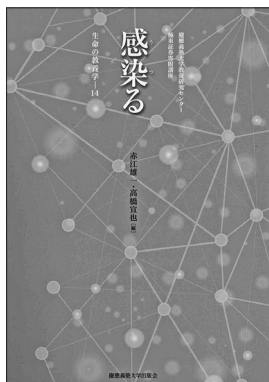
■34号 2019年5月15日刊行

■35号 2019年11月30日刊行

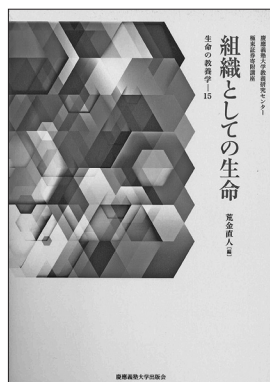
日吉所属教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletterを年2回刊行し、半年間の活動についてレポートを行い、今後の予定について告知する。巻頭言などのコラムもある。

(高橋宣也)

# 2019年度教養研究センター 刊行物一覧



極東証券寄附講座  
生命の教養学 14 感染する  
(2019.9.30 刊行)



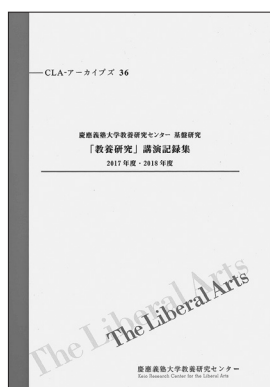
極東証券寄附講座  
生命の教養学 15 組織としての生命  
(2019.4.25 刊行)



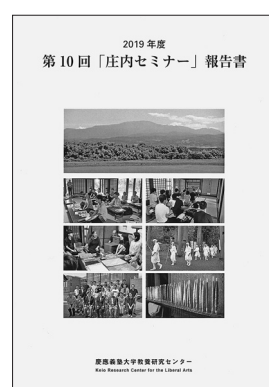
2019年度  
アカデミック・スキルズ学生論文集  
(2020.3.31 刊行)



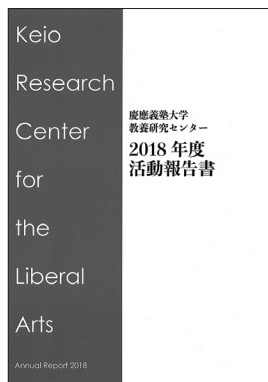
教養研究センター選書  
(2020.3.31 刊行)



C L A アーカイブズ 36  
基盤研究「教養研究」講演記録集  
2017年度・2018年度  
(2019.9.30 刊行)



2019年度  
「庄内セミナー」報告書  
(2020.1.20 刊行)



2018年度活動報告書  
(2019.8.31 刊行)



Newsletter34号  
(2019.5.15 刊行)



Newsletter35号  
(2019.11.30 刊行)



教養研究センター  
パンフレット  
(2019.4.1 刊行)

## 基盤研究・一般研究・ 特定研究

### 基盤研究

1. 「基盤研究」として、現在、構想されているプロジェクトには次の5つがある。すなわち、(1)教養研究、(2)教養教育研究（①劇場プロジェクト②ゲームの教養学）、(3)教養連携研究（①高大連携プロジェクト（「教養の一貫教育」）、②文理連携プロジェクト）、(4)社会・地域連携研究、(5)大学教育カリキュラム研究（大学院設置）である。(1)～(3)については(2)①劇場プロジェクトを除いて、いずれも具体的な企画が進行中であり、2019年度に新たにスタートできた。詳細は以下の項目で説明する。(2)②ゲームの教養学については、寄附講座として設置が実現することになり、新島進所員によって具体的なプランが練られることになった。
2. 「社会・地域連携研究」については、2019年度からの「日吉学」設置科目化が決定している状況の中で、新たな研究の枠組みでの社会・地域連携を考える必要があるという結論に達した。横山千晶教授によるコミュニティ研究会などの取り組みが進んでいる。
3. 「大学教育カリキュラム研究」については、今後、日吉に置ける大学院設置を目指して、議論が高まり、2019年度から大学院設置を「大学教育カリキュラム研究」の中に位置づけることになった。

### 一般研究

例年通り、申請のあった研究活動に対して、研究オフィス運営協議会の承認を経て、来往舎2階のプロジェクト研究室（204室、205室）とプロジェクト研究員室（202室）を、研究オフィスとして提供した。これまで一般研究については、所員の申請がほぼ自動的に認められていたが、2018年度より、まず、研究プロジェクトをコーディネート・オフィスの承認のもとにしっかりと位置付けるべきという考え方に立って、全てのプロジェクトについてコーディネート・オフィスで審議され、その承認をもって、研究オフィスの提供をおこなった。

### 特定研究

2019年度、この項目について特段の活動は行われなかった。

#### 2019年度・プロジェクト研究員室（202室）利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ	利用者氏名・所属
小林拓也・理工学部専任講師	海外からのインターン生の滞在を有効活用するためのプログラム開発と実践	ベルナ、ロマン (理工学部協定学生)
鈴木晃仁・経済学部教授	精神医療の資料整理及び目録作成	清水ふさ子 (社会学研究科研究員(非常勤))
鈴木晃仁・経済学部教授	日本におけるトラウマとモダニティ:戦争と労働災害をめぐる経験・解釈・補償制度	中村江里 (社会学研究科訪問研究員)

#### 2019年度・プロジェクト研究室（204室・205室）利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ
小原京子・理工学部教授	意味フレームに基づく言語資源の改良と他の言語資源とのリンク
津田真弓・経済学部教授	日本学教育の国際化に関する研究
森吉直子・商学部教授	Corporate Visual Identity に対する消費者反応に関する国際比較研究
阿久沢武史・慶應義塾高等学校教諭	地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用



2019年度2回目は、2020年1月15日18:15～19:45、日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペースに於いて行われた。当日の司会は小菅が務めた。南條先生は、慶應義塾大学経済学部および文学部哲学科美学美術史学専攻を卒業され、国際交流基金(1978～1986年)を経て2006年11月より2019年末まで森美術館の館長を務められた。過去に様々な国際展覧会に関わる一方、森美術館にて自ら企画者として携わった近年の企画展に「医学と芸術展：生命(いのち)と愛の未来を探る—ダ・ヴィンチ、応挙、デミアン・ハースト」(2009～10年)、「メタボリズムの未来都市展：戦後日本・今甦る復興の夢とビジョン」(2011～12年)、「LOVE展：アートにみる愛のかたち—シャガールから草間彌生、初音ミクまで」(2013年)、「宇宙と芸術展：かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」(2016～17年)、「建築の日本展：その遺伝子のもたらすもの」(2018年)、「未来と芸術展：AI、ロボット、都市、生命—一人は明日どう生きるのか」(2019～20年)がある。また、近著に「疾走するアジア—現代美術の今を見る」(美術年鑑社、2010年)、「アートを生きる」(角川書店、2012年)がある。当日の講演主旨を南條先生は、以下のように説明された：「…クリエイティブティビティーとは、ルールに従うことでなく、ルールを疑い、新しいルールを提案することです。(中略)アートは現代においては、もはや絵画と彫刻のことではなくなっています。それは、ものの考え方なのです。たとえばアートとデザインの違いは、デザインは問題解決の方法だが、アートは問題提起が本質であるといわれます…。」南條先生は、この主旨にそって実例を挙げつつ説明されたが、“ものの考え方において独創的であるべし”とは教養の究極的目標であると実感できる講演会であった。当日は、学生のみならず教員も含めて160名が集まり、南條先生のたいへん刺激的な講演と質疑応答によって充実した研究講演会となった。

2019年度はシンポジウムは実施できなかったが、2020年度は、研究講演会を2回、シンポジウムを1回として、教養研究センターのホームページで公開していく予定である。

## 基盤研究「教養連接研究」高大連携プロジェクト

基盤研究「高大連携プロジェクト(教養の一貫教育)」は、慶應義塾大学教養研究センターと慶應義塾高等学校の連携事業として、慶應義塾における「教養の一貫教育」を実現するための基盤構築を目的とするプログラムである。本プログラムは、慶應義塾が小学校、中学校、高等学校、大学、大学院、諸研究所を擁する日本有数の複合教育組織である強みを生かし、「教養」という枠組みにおいて、生徒・学生間の交流、教職員の連携、教育プログラムの共有を実現することで、学生においてはより豊かな人間性を涵養し、教職員においては相互の情報共有と研究交流を可能にし、教育プログラムにおいてはより多様性を持った内容を立案することができる環境の実現を目指している。2019年度は立ち上げの年として、3回の催事が行われ、いずれも、非常に充実した催事となった。以下、概要を報告する。

### (1) 教養の一貫教育 Vol.1 2019年5月30日

日吉教育ホール

「新入生歓迎行事：吉増剛造 後輩たちに語る—慶應義塾のこと、新作映画『幻をみるひと 京都の吉増剛造』のことなど—」

### (2) 教養の一貫教育 Vol.2 2019年10月31日

日吉教育ホール

「中国の宝塚・越劇—実演と解説」

### (3) 教養の一貫教育 Vol.3 2019年11月26日・27日

日吉教育ホール

「舞踏家・雪雄子による身体表現ワークショップ」

第1回の催事は、1960年代から世界の詩の現場の最前線で活躍されている吉増剛造氏に担当いただいた。南三陸志津川町の塾有林を使用した、杉の柔らかなみずみずしさの立ちあがる東北の記憶に寄り添うホールで、吉増剛造氏は新作映画を辿りながら震災後に釜石・石巻・浪江を訪れたこと、吉本隆明や萩原朔太郎のこと(新作GOZOCINE『朔太郎フィルム』の上映)、そして吉本隆明『日時計篇』をびっしりと吉増氏自身が書きとめた原稿へのインクのドロッピング、若林奮の槌での銅板の打刻など、そうして立ち上がった吉増氏の〈声〉の場に、会場に集まった150名ほどの塾高生、大学生からの応答と反響がやまず、参加者にとって何とも忘れがたい稀有な一日となった。

第2回の催事は、2019 東京・中国映画週間（東京国際映画祭関連企画）にて来日した総勢 30 名超の上海越劇院の主要メンバーにお越し頂き、学生向けの解説と実演（映画祭で上映される映画の一部上映含む）をおこなった。中国の宝塚とも言われる越劇が来日するのは 30 年ぶりとも言われ、中国の伝統演劇の一端に触れる非常に貴重な機会となったことは間違いない。今回は、中国伝統芸能の専門家でもある理工学部の中野一夫教授に京劇や崑劇などの他の伝統演劇にも言及しながら概説をお願いし、塾員で優れた崑劇俳優でもあるムーランプロモーションの陸海栄氏に随時実演をして頂いた。大学の学生や高等学校の生徒にも分かりやすい形での解説が行われ、続いて、越劇の実演部分では、中国映画週間で上映予定の舞台映画の一部を上映し、おおよそのストーリーを理解してもらった上で、演目の見せ場の部分を選びすぎて実演してもらった。演目は、『紅樓夢』『梁山伯と祝英台』『西廂記』から、時間に合わせて実演された。

第3回は申し込み制のワークショップで、塾高生、大学生、教員を含めて 13 名の参加があった。このワークショップでは、雪雄子（1950 年生、青森県在住の女性舞踊家）を講師として、自らの体を見つめなおすワークショップを 2 日間行い、最後は、参加者が独自のパフォーマンスを繰り広げた。雪雄子は 1970 年代から 80 年代にかけて、女性舞踏集団「鈴蘭党」を主宰した女性舞踏手のパイオニアである。当日は、講師の指導によって自ら動き、人の動きを見ることで、自分の身体を開放し、より豊



かな身体感覚を養い、有効な身体表現を学ぶ実践的講座をおこなった。雪雄子は今回のワークショップにあたって、次のようなメッセージを寄せている。「私の暮らす、岩木山麓の谷間に風が吹きすさぶ。雪が降りはじめ、ゆっくりと降り積もる。11 月、結氷した沼地に白鳥たちがやってくる。まるで神の翼が舞い降りたかのように一。3 月、白く白い宇宙交響を沼地に遺し極北へと旅立つ。一私の内部に育った白鳥も、共に。」雪雄子のワークショップは心身を開放し、二日目最後には、白鳥のように飛び立つことを目指したが、二日間、オブザーバーとして参加した慶應義塾高等学校古川教諭と教養研究センター小菅隼人には参加者全員が見事に「飛び立った」ように感じた。個人の中に湧き出た教養の湧水はやがて大河となって豊かな人生を形成する。「教養の一貫教育」は、高校／大学間で途切れることのない教養教育を目指すプロジェクトである。

（小菅隼人）



## 基盤研究「教養接続研究」文理接続プロジェクト

2019年度には文理接続プロジェクトの一環として「医学史と生命科学論」の講演会とディスカッションを6回開催した。慶應の日吉キャンパスを持つ、教員と学生の文系と理系の双方がいるという特徴に着目した。その中でも、医学史と生命科学論という視点を選び、人文・社会科学系の文系の視点と、医学部、看護学部、理工学部、薬学部などの理系の視点の接続に注目した。

形式としては、月に一回のペースで、火曜日夕刻の18時15分から90分の講演とディスカッションであった。どの会においても、講演もディスカッションも延長され、演者と教員・学生たちが熱い議論に入った。その映像などは公開されているので、ご覧いただきたい。(http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/research/kiban/) 医学史と生命科学論が、経済学、文学、歴史学と重なっていく試行として、一連の成功をおさめたと考えられる。

ひとつの非常に新しい試みは、第3回のセミナーであった。これは英語で行われ、その映像もヨーク大学のサンジョイ・バッタチャリア先生がWHOとともに組織しているGlobal Health Histories Seminarの第128回の講演会となった。国際化を試みた第3回については、講演動画や原稿なども公開されている。少なくともその質に関しては、非常に成功した試みであった。(写真とポスター参照)

これらの成功の部分と並行して、かならずしもうまく行かなかった部分もあった。それが動員力の問題である。医学史と生命科学が、哲学、文学、歴史



学、経済学といった学問と協力していこうという企画が、必ずしも多くの聴衆を動員することができなかった。この問題をどのように考えるのか、これからの文理接続の大きな課題だろうと考える。

一覧表は以下の通りである。

### 第1回

2019年4月16日

鈴木晃仁（慶應義塾大学経済学部）

「症例誌と文学と社会：医学と様式と歴史の複合」

### 第2回

2019年5月21日

荒金直人（慶應義塾大学理工学部）

「ラトウールの科学論と「物の歴史性」を非還元性の原則から捉え直す」

### 第3回

2019年6月25日

Hiroaki Matsuura (Shoin University)

Global Health: Where Science Meets Humanity and Social Sciences

(Global Health Histories Seminar WHO, York University of, 128)

### 第4回

2019年10月8日

後藤励（慶應義塾大学大学院経営管理研究科）

「医療費の増加と医療の経済政策の政策利用」

### 第5回

2019年11月5日

小川公代（上智大学外国語学部）

「『フランケンシュタイン』の天才論」

### 第6回

2019年12月17日

片山杜秀（慶應義塾大学法学部）

「<日本イデオロギー>としての科学と技術」

(鈴木晃仁)

18:15—19:45  
25 June 2019  
Symposium Space  
Hiyoshi Campus,  
Yokohama  
Keio University

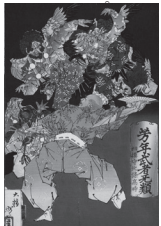
Global Health Histories Seminar 128:  
**Health and Disease across Cultural  
and Disciplinary Boundaries in a  
Global World**

**Panellists:** Professor Hiroaki Matsuura  
(Shoin University) & Professor Akihito Suzuki  
(Keio University)  
**Moderator:** Professor Sanjoy Bhattacharya  
(University of York)

This seminar seeks to create frameworks for discussing the global and multidisciplinary experience of social science and historical and transboundary experience of Japan.

Professor Hiroaki Matsuura will discuss his own experiences of different regions of the world, combining multi-disciplines of medicine, diseases, public health, technology and economics.

Professor Akihito Suzuki will explore complex political and cultural networks of Japanese psychiatric treatments about foreigners who expressed transboundary emotions in the earlier half of the twentieth century.



“Togo Takakoshi, the Governor of Sagami” from Takakoshi Yoshitoki, Yoshitoki Meicho Buro (1883-1885)

WILSON UNIVERSITY OF YORK KEIO UNIVERSITY World Health Organization Europe



I 研究関連プロジェクト

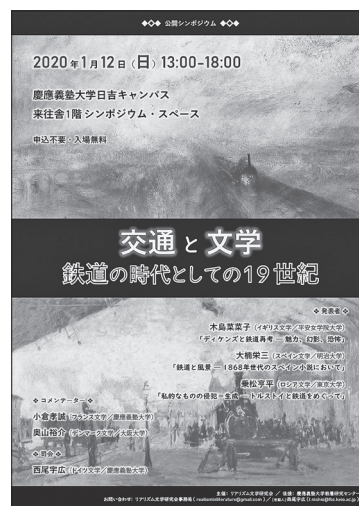
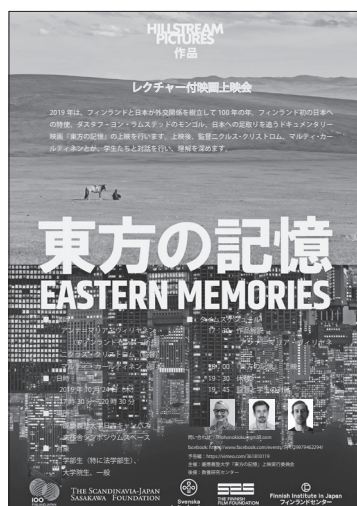
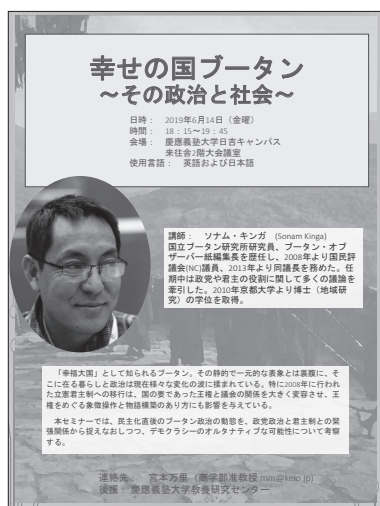
研究成果公表  
学会・ワークショップ等  
開催支援

教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し促

進することを趣旨としており、2019年度は以下の16件が採択となった。なお、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、2件は開催延期となった。(小菅隼人)

2019年度 学会・ワークショップ等開催支援一覧

申請者	会合名	開催日	場所	参加人数
磯崎 敦仁 (法学部)	公開シンポジウム「北朝鮮とどう向き合うか」	2019年5月15日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 35名 塾外 30名
中谷彩一郎 (文学部)	ワークショップ「日本における西洋古典受容」	2019年5月25日	来往舎 大会議室	塾内外 20名
武藤 浩史 (法学部)	日本ロレンス協会第50回記念大会	2019年6月8日～9日	来往舎 中会議室	塾内 20名 塾外 40名
宮本 万里 (商学部)	セミナー「幸せの国ブータン ～その政治と社会～」	2019年6月14日	来往舎 大会議室	塾内 24名 塾外 12名
朝比奈 緑 (商学部)	日本エミリー・ディキンソン学会第34回大会	2019年6月15日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 2名 塾外 49名
渡名喜庸哲 (商学部)	シンポジウム「キャンパスにおける性犯罪を防止するには」	2019年6月21日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 50名 塾外 40名
熊野谷 葉子 (法学部)	日本ロシア語教育研究会 サマーセミナー「持続可能性言語教育の可能性」	2019年8月3日	来往舎 2階 大会議室	塾内 3名 塾外 22名
村山 光義 (体育研究所)	日本体育学会第70回大会 公開シンポジウム&講演会	2019年9月11日～12日	第4校舎独立館DB 203	塾内 20名 塾外 500名
大出 敦 (法学部)	日本・フィンランド外交100周年記念 映画「東方の記憶」レクチャー付上映会	2019年10月24日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 28名 塾外 11名
ジャン・マルティン・ アルベルト (経済学部)	シンポジウム「いろいろどりの『家族のかたち』 ～パートナーシップと多様な“幸せ”について考 えよう～」	2019年12月8日	第4校舎B棟J 11	塾内 50名 塾外 100名
横山 千晶 (法学部)	第4回意匠学会デザイン史分科会/ウィリアム・ モリス研究会	2019年12月21日	来往舎 中会議室	塾内 4名 塾外 17名
西尾 宇広 (商学部)	公開シンポジウム「交通と文学：鉄道の時代とし ての19世紀」	2020年1月12日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 11名 塾外 37名
井本 由紀 (理工学部)	Contemplative Theatre Workshop ～内観とシアターワークを取り入れた身体知教育 の実践～	2020年1月26日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 5名 塾外 10名
津田 眞弓 (経済学部)	「マシンと読むくずし字 —— デジタル翻刻の未 来像」	2020年2月8日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 12名 塾外 67名
熊野谷 葉子 (法学部)	シンポジウム形式連続講義 「明治日本と帝政ロシアの美術工芸：その共通点と 交流をたどって」	延期	—	—
大出 敦 (法学部)	クローデル・シンポジウム 2020 クローデルとその時代	延期	—	—



## I 研究関連プロジェクト

### 研究交流

### 研究の現場から

教員が自身の研究内容を自由に語る企画で、軽食を交えての議論も活発に行われる。

2019年度は例年通りに春学期に1回、秋学期に2回開催された。

#### ■第1回 2019年6月19日（通算第25回）

講師：見上公一（理工学部）

「研究の研究：自然科学と社会科学の協働を目指して」


見上先生は、科学や技術に対する人文科学、社会科学的なアプローチというテーマのお話であった。20世紀における自然科学の急激な進展は、社会的な立場や人文的思考との乖離をもたらし、科学技術の暴走をも引き起こしかねない状況にある。この事態を改め、両者に橋渡しをする必要性が高まっている中で、ゲノム合成という最先端のトピックを例に、協働の可能性について意義ある展望が示された。

#### ■第2回 2019年10月23日（通算第26回）

講師：石川学（商学部）

「バタイユ思想の「倫理」的射程——戦争をめぐる思索から」

石川先生は、バタイユの専門家として、彼の思想における倫理的側面について話された。バタイユと言えば「エロティシズム」を称揚した思想家として、倫理とは隔絶した立場にありそうだが、実は国家という次元が押しつける正しさに対抗して個人の生の充実を目指す「瞬間の倫理」こそ、バタイユが重んじたことなのだという見落とされがちな論点が、彼のテキスト「広島に住民たちの物語について」（1947）を軸に提示された。



研究の現場から  
サロン日吉 円卓の会へ  
ご招待！

「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、教員の研究分野を紹介し、和やかな雰囲気でお話する企画です。  
軽食をとりながら、学部や分野を越えての交流も深められます。

第二十五弾 6月19日（水）18:15～ 来往舎1階101  
見上 公一（理工学部 専任講師）  
「研究の研究：自然科学と社会科学の協働を目指して」

日吉キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに素敵なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教養研究センターは考えます。  
ぜひお気軽にお立ち寄り下さい！

主催：教養研究センター tojiawase-lib@adst.keio.ac.jp

#### ■第3回 2019年12月11日（通算第27回）

講師：ジョナサン・デイル（理工学部）

「村上春樹の『騎士団長殺し』を読む」

デイル先生は、村上春樹の『騎士団長殺し』と前作『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』に対して、ユング心理学と錬金術という観点から興味深い解釈を披露された。錬金術においては色彩が重視されており、色の変化にも意味を認めているが、村上の両作における色彩への言及を整理すると、錬金術的な説明が可能となる。村上にはデイル先生のインタビューでは錬金術の影響を正面からは認めなかったというが、村上作品の読解の鍵となる方策が示されて刺激的だった。

（高橋宣也）

## 研究交流 読書会推進企画 「晴読雨読」

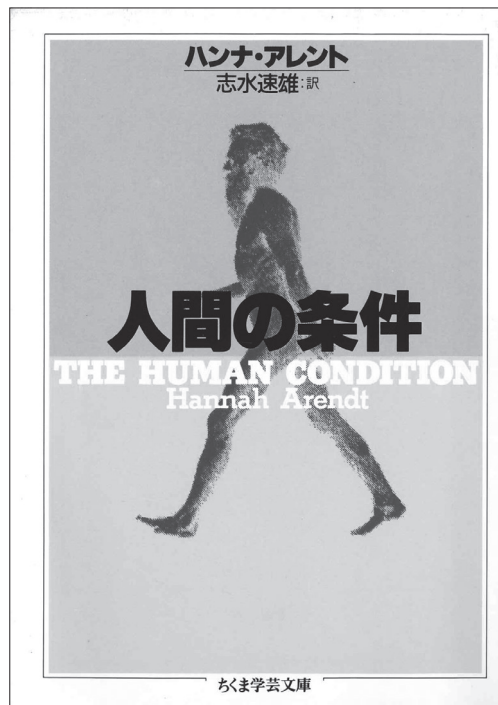
### ハンナ・アレント『人間の条件』を読む

ハンナ・アレント『人間の条件』の読書会は2018年4月にスタートした。2018年度は7回開催したが、全体の半分強しか進まなかったため、最後まで読み切ることを目標として2019年度も継続することとなった。今年度は4月19日（金）、5月17日（金）、6月28日（金）、8月2日（金）、10月4日（金）、11月8日（金）、12月20日（金）と昨年度と同じく計7回実施した。昨年度の参加者は学生も含め、多くの人が継続してくれた。途中からにもかかわらず、新規に参加してくれた学生も多く、最後まで15名前後の参加者を得て活発な議論をすることができた。

昨年度と同様、商学部の西尾宇広先生と渡名喜庸哲先生に議論の先導役となっただき、毎回3～4節ずつ読み進めた。さまざまな角度から疑問点を出し合うことで、全体の理解を深めることにつながった。また、原書を確認したり、他言語への翻訳を参照しながら読み進められたのも、外国語教員の多い日吉キャンパスならではの経験だったと思う。ときにはアレントの独特な言葉遣いや彼女の外国語運用能力にまで議論が広がることもあり、毎回、濃厚な時間を共有することができた。特に学生が積極的に議論を牽引してくれたのが頼もしかった。

一冊のテキストに時間をかけて取り組むという機会は得難い経験となった。2年間かけて最後まで読み切ったときの達成感はひとしおだった。読書会の参加者にとってもこの本は愛着ある特別な本になったことと思う。

(工藤多香子)



## 丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む

教養研究センター主催読書会「晴読雨読」では、2017年度から、ほぼ連続したかたちで、日本の哲学・思想・歴史に関連する文献を講読している。所長の小菅隼人を案内人、副所長の片山杜秀を解説役とすることで一貫している。2019年度は、2018年度より継続して、丸山眞男の『日本政治思想史研究』を読む回を重ねた。これに先んじて、2018年度の秋に「『論語』は日本でどう読まれてきたか—荻生徂徠を中心としつつ、伊藤仁斎から安富歩までの『論語』理解を知る」と題した読書会を2回行ったが、その企画は、教養研究センターが「庄内セミナー」を通じて深いかかわりを持たせていただいている山形県鶴岡市で、徂徠学が江戸時代の藩の学問であったこととつながると同時に、丸山が荻生徂徠に比重を置いてまとめた『日本政治思想史研究』を読むための導入でもあった。この『論語』の解釈を巡る読書会を受けての『日本政治思想史研究』を読む会は、2018年度の12月26日に始まり、1月31日、3月14日と開かれ、4回目から2019年度に入って、4月23日、5月28日、7月30日、9月25日、12月4日、1月22日に行われて、全体を読み終えた。2019年度だと6回、前年度から合わせて9回かかったことになる。参加者は、学部生や院生の加わることもあったが、いわゆる常連さんとしては教員と通信教育課程の学生及び卒業生が多く、小さく儉しい会ではあるけれど、解説と質疑応答を濃密に詰め込んで毎回2～3時間をかけ、丸山の描いた江戸思想史の現代的意味合いの究明を試みた。解説役の片山は、最初からそれを意図していたわけではないのだが、せっかくの読書会において、初心者にも噛んで含めさせていただくようなつもりで『日本政治思想史研究』を読み、参加者諸氏の疑問や意見に学ばせていただいた経験を活かそうと、2020年度の学部のオンラインによる授業のひとつを、丸山に充てている。『日本政治思想史研究』をテーマとし、教材には読書会向けに作ったレジュメを用いている。読書会のおかげで、ひとつの授業の材料を一年以上かけて作らせてもらえたことになる。ぜひ多くの先生方に、そのようにも読書会の場を活用していただけたらと、僭越ながら冀い奉る次第である。

(片山杜秀)

教養研究センター主催読書会 晴読雨読

丸山眞男 最終回

## 『日本政治思想史研究』 を読む

片山杜秀君（法学部教授・教養研究センター副所長）と一緒に、丸山眞男『日本政治思想史研究』を通読します。

第9回（最終回）では、第3章の第3節から最後までを読みます。

関連事項、本の周辺については、レジュメやコピーを配布し補います。

第9回 1月22日（水）18：15～

場所：日吉キャンパス来往舎1階 101

対象：教職員、塾生、大学院生

課題図書：丸山眞男『日本政治思想史研究』（東京大学出版会）

お問合せ toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

主催：慶應義塾大学 教養研究センター

丸山眞男 著

## 日本政治思想史研究

東京大学出版会

## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-1 アカデミック・スキルズ

大学教育で論文作成能力や研究発表能力が重視されるとは言ってもない。しかし、授業のとりようによっては、学部の4年間、レポートはまず避けたいとしても、本格的な論文というほどのものや、まとまった時間の個人発表をすることなく過ぎて、そのまま卒業してしまう学生も居るだろう。また、たとえば3年生に入ってゼミナールに入り、そこでさかんに論文執筆や研究発表を要求されるのだが、その前には全くそういう経験がなく、大いに戸惑う学生もあるだろう。アカデミック・スキルズはそこに注目して始まった。3、4年生が履修しても構わず、ときおりそういう方もあるが、主に1、2年生を念頭に置き、あとで困らないように、論文の書き方や発表の仕方を一通り学んでおこうという授業である。同趣向の講座は、近年、東京工業大学等、多くの大学で、必修や選択必修のかたちで設けられるようになったし、高校教育にも広がりを見せている。教養研究センターのアカデミック・スキルズは、その種の授業のパイオニアとしての歴史と実績を持つと自負するところであり、実際に他大学や全国の高校から内容についての問い合わせを賜ることも多い。とはいえ、肝腎の塾内の諸学部への影響力の点では必ずしも十分とは言えず、そこはまことに忸怩たるものがある。

2019年度は、日本語クラスを3つ、英語クラスを1つ開講した。担当教員は、水曜クラスが、片山杜秀(法、採点責任者)、治山純子(法)、木曜クラスが、石川学(商)、小林拓也(理、採点責任者)、宮本万里(商)、金曜クラスが、杉山有紀子(理)、原大地(商、採点責任者)、御園敬介(商)、英語クラス(月曜開講)が加藤有佳織(文)であった。

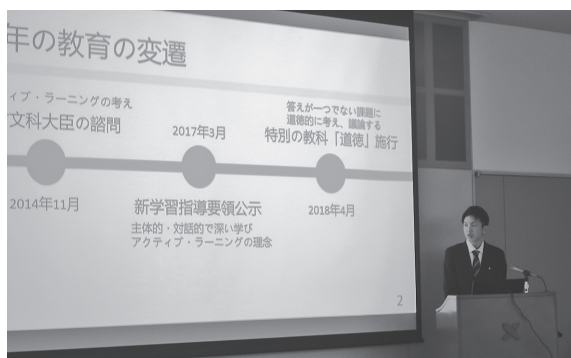
授業内容は長年の原則を踏襲し、春学期に4000字、秋学期に8000字の論文作成を課し(英語は相当字数)、秋学期にはさらに論文内容のプレゼン

テーションを行うというものである。具体的な進行については担当教員に委ねており、統一的に細目を定めたシラバスはない。履修者数は、「履修申込者・履修許可者・最終論文が年度末論文集に掲載された者」の順で記載すると、日本語水曜クラスが「41・20・14」、木曜クラスが「36・24・10」、金曜クラスが「19・19・10」英語クラスが「4・3・2」であった。

年度末には、例年通り、論文とプレゼンテーションの両部門に分かれてのコンペティションが行われた。論文コンペティションには7本の論文が参加し、金賞1、銀賞1が選出された。プレゼンテーション・コンペティションには8人が参加し、来場者の無記名投票によって、金賞1、銀賞1、銅賞1が選出された。

全体の傾向として、2017、2018年度にみられた履修者の減少傾向に歯止めが掛かり、2018年度に開講できなかった英語クラスも復活し、しかも履修者の作成論文に優れたものが多く、この授業の意義はまだ健在であり、諸学部の必修科目にするつもりで大切に保ち育てなくてはという思いを深くした。(片山杜秀)

2019年度極東証券会附講座  
**Academic skills**  
アカデミック・スキルズ  
**Presentation**  
プレゼンテーション  
**Competition**  
コンペティション  
2月6日(木) 14:00~18:00  
日吉キャンパス来台舎1階シンポジウムスペース  
発表者: 2019年度「アカデミック・スキルズ」クラス1・目代表者  
学生が一年間培った「知的探求力」を  
遺憾なく発揮します



## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-2 生命の教養学

##### —生命の経済（エコノミー）

2019年度の「生命の教養学」のテーマは「生命の経済」だった。人間や動物の生命が巨大な経済的プロセスに巻き込まれるとき、あるいは生命の営み自体を一つの経済的活動として捉え直すとき、はたして生命はいかなる相貌を呈するのか、という問いを出発点とした11名の専門家による連続講義である。講演者（所属・職位、専門）と講義題目は以下の通り（敬称略、登壇順）。①稲村一隆（早稲田大学政治経済学部准教授、政治哲学）「アリストテレスの政治学における生命と経済と互惠性」。②駒村康平（本学経済学部教授、社会政策）「技術と社会経済システム」。③中川秀敏（一橋大学大学院経営管理研究科教授、数理ファイナンス）「「死亡リスク」と「長生きリスク」～ファイナンスという観点から」。④森さち子（本学総合政策学部教授、臨床心理学）「心のダイナミズム」。⑤星野崇宏（本学経済学部教授、行動経済学）「行動経済学とビッグデータから探るヒトの意思決定と行動」。⑥山本浩司（東京大学経済学部准教授、西洋経営史）「黎明期資本主義における市場・福祉・公共善」。⑦宮本万里（本学商学部准教授、政治人類学）「屠畜と肉食のエコノミー、その人類学的考察」。⑧奥田知明（本学理工学部准教授、環境化学）「環境基準とは何か」。⑨清水史郎（本学理工学部教授、生物化学）「細胞におけるタンパク質の翻訳後修飾の意味」。⑩田中泉史（本学文学部准教授、科学哲学）「「生命の経済」という視点からみた人間の特異性」。⑪石川学（本学商学部専任講師、フランス文学・思想）「成長とそ



の運命：生命体と社会の「全般経済」。以上、「万学の祖」アリストテレスからはじまって社会科学の多角的な視点へ、さらに歴史学とフィールドワークと自然科学の知見を経て、最後は人文科学の考察へと向かう一連の講義は、「生命」と「経済」の複雑な関係を多様に照らし出す刺激的な議論となった。

2019年度の履修者は78名、内訳は理工学部39名、商学部12名、経済学部10名、薬学部8名、文学部5名、法学部3名、医学部1名で、偏りはあるものの、日吉に集う全学部の学生の参加を得ることができたのは幸いだった。活気あふれる各回の質疑応答と最終日の全体討論の様子に照らして、多くの学生が学際的な知の醍醐味に触れてくれたことを確信している。また、本授業の講義録『生命の教養学16／生命の経済』が慶應義塾大学出版会より2020年6月に刊行された。

（西尾宇広）

## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-3 身体知

##### —創造的コミュニケーションと言語力

文学作品を、紙の上で黙読するのみならず、声に出して読んでみる、あるいは他者の解釈を聞いてみる、そして他者と共に様々な身体的なワークショップを通して読み直してみる。するとどのような解釈が可能となるであろうか。また、異なる世代で読み解くことで、一つの作品はどのような新しい様相を呈してくれるだろうか。今年もその過程を授業の中で味わうために、2019年8月12日から17日までの集中講座が開催された。今年も通信教育課程から14名の参加があり、通学生7名と共に、合計21名の参加者を迎えた。

今回は「自己と他者」をテーマに、まったく味わいの異なる4作品が素材として選ばれた。男女のちょっとしたすれ違いを小気味よいテンポで描いた、ブルース・イアソン作の「アパラチアン・トレイル」。私たちの中に根付く偏見を白人と黒人双方の視点から描いたラリー・フレンチ作の「ミスター・マムスフォード」。ある事件を客観的に描きながらも異なる人々の経験を並列させたハナ・ボトミー作の「海流」。そして移民と言葉と経験の問題を美しい文体でつづったジュリア・アルバレス作の「スノウ（雪）」である。今回は、日本語による作品を全く選ばず、日本語訳も出ていない作品を講師が訳したものを題材とした。これも「他者」との出会いを念頭に置いてのことである。

喜劇的なテーマを盛り込んだ「アパラチアン・トレイル」は、男女二人の会話がコメディ・タッチで進んでいくものの、話者はその一人であるために、もう一人の人物像と視点は読み手の解釈に任される。果たして、この二人の関係性やそれぞれの人間性をめぐって、様々な解釈が提示された。続く「ミスター・マムスフォード」は、人種間の偏見を複層的に描いた作品である。一見して白人が抱く黒人差別

の裏には、同じように黒人側からの白人に対する紋切り型の偏見があることが、読んでいく過程で明確になってくる。そして緊張の後に和解決した二人が互



いに掛け合う一見優しい言葉そのものが、実はこの偏見をさらに残酷に裏うちしていることが読み解かれると、「差別」ではなく私たちの中に無意識のうちに根を張った「偏見」の存在を参加者は実感することになった。3作目の「海流」は、一人の男子の溺死という事件について、その場で起こったことを淡々とつづっていく作品であるが、それだけに関わっている人々各自のドラマを想像できる作品となっている。どの人の立場でその場に居合わせるかを想像することで、事件を目の当たりにする感情がリアルになってくる。また「海流」という言葉が表すように、リズムのあるその文体は音楽すら想起させるものであり、この作品はリズムに合わせて「皆で波になってみる」という身体知ワークショップを通して、より広がりを見せる読み解きを可能とした。最後の「スノウ（雪）」は、キューバ危機を背景にした移民の少女の物語である。ここでも「他者」の存在は複雑である。ドミニカ出身の少女にとって、アメリカの敵となるキューバの人々は民族的に自分に近い存在である。その中で少女とその家族はどのようにこの歴史的な事件を体感するのだろうか。危機感の中だからこそ、「雪」という存在とその言葉の美しさは朗読することで、その意義を明確にする。この物語については、最後に扱う物語として、みんなで同時に動き、朗読することで、大きな一つの身体的な物語へと展開していった。

2019年度も様々な身体ワークショップを取り入れた。今年もペアになって外の空気を感じてみるブラインド・ウォークのワークショップを行ったほか、各自でテキストや身体ワークショップで感じたことを絵にして表現してみる、グループで絵を描いてみる、そしてそれぞれの作品にあわせて言語以外の表現形式のワークショップも取り入れることで、文字の世界をさらに大きく広げていった。今年はいえ身体ワークショップとその日に読む作品のつな

がりを最初から説明せずに授業を進めていき、各授業の振り返りで、その関係性について考え、身体的なワークショップが読み解きに与えた影響について考えてもらった。最終日には創作発表会を開催したが、本年度も作品からインスピレーションを得た作曲の演奏、コントなど多種多様な創作が披露された。同時に過去の同授業への参加者や一般参加者も発表会に来場し、活発なフィードバックが行われた。

今年も各授業のあとに振り返りシートを提出してもらい、授業の終わりにクラス全体を振り返るアンケートを実施した。振り返りシートでは、活動への疑問点や自分の中での思ってもみない感情の想起が提示されており、それは講師にとっても授業の運営に際して大きな参考となった。最後の授業評価は、おおむね高評価を得た。今年挙げられた大きな点は以下の3つである。1. 各自が自分の意外な一面に気が付いたこと。2. 文学への態度が大きく変わったこと。3. 他者に自分をゆだねてみることで、安心感を得たこと。また、自分の意見が他者の共感を得たことへの驚きと感動。

本年度も8月の6日間を共にした仲間たちは、いまだに交流を続けており、このコミュニティの創設は、この授業の大きな特徴ともいえる。

ただし、課題がないわけではない。授業では、密な関係の構築から、他者に自らを開く安心感が生み出される一方で、自分を開きすぎてしまう危険性も出てくる。他者の苦しみに自分の苦しみを投影することで、思ってもみない感情の揺さぶりが起こるときもある。グループダイナミズムの動向を注意して見守ると同時に、参加者一人ひとりのケアも今年はいつものにも増して必要となった年であった。これは今後も考えていく課題である。

(横山千晶)



1 設置科目

1-4 身体知・音楽

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」では、株式会社白寿生科学研究所からの寄付を受けた寄附講座として、2019年度においては従来通り2つの授業が開講された。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」(器楽クラス)であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」(声楽クラス)である。前者は、17世紀および18世紀の音楽に焦点を当て、後者は、17世紀から21世紀まで幅広い音楽を扱った。また、2019年度は、3年に一度というペースで実施してきているオペラプロジェクトを行う年に当たり、器楽クラスおよび声楽クラスを履修している学生の中から希望者が任意でプロジェクトに加わった。

それぞれの授業は、音楽学および音楽演奏の専門家が担当した。器楽クラスは、経済学部教授の石井明が全面的に指導し、声楽クラスは、元商学部教授(現ICU教授)の佐藤望氏と、声楽家である藤井あや氏および青木海斗氏に、合同で授業の担当をお願いした(なお、青木氏は年度途中で担当から外れた)。

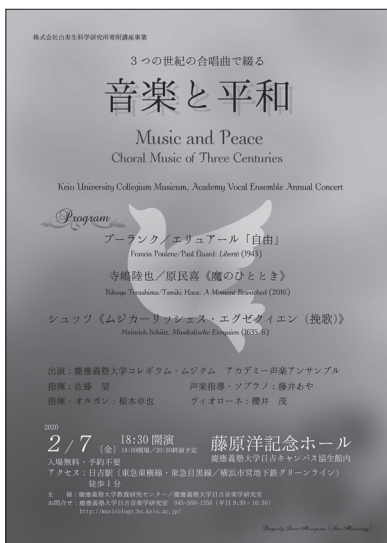
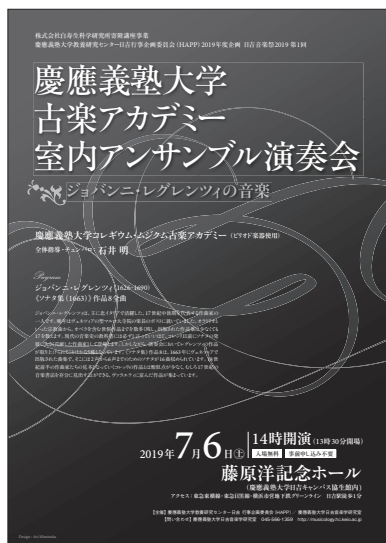
2019年度の器楽クラスは、35人規模のバロック・オーケストラが編成された。古楽器のみを使ったこの規模のオーケストラは非常に珍しく、一般大学だけでなく音楽大学でこのようなことが授業として行われている事例は日本では無く、また、常設のプロの演奏団体すら、国内ではほとんど見ることができない。2019年度は、授業の成果発表演奏会を2

回開催した。1回目は、7月6日に「ジョバンニ・レグレンツィ(1626-1690)《ソナタ集(1663)》作品8全曲演奏会」と題した、17世紀のイタリアの音楽に焦点を当てた室内アンサンブルによるコンサートを行った。1月18日には、「音楽で出会う諸国の人々」と題した、18世紀前半のオーケストラ音楽を扱った、バロック・オーケストラの演奏会を開いた。

声楽クラスは40名規模のアンサンブルとなり、参加者数が多かったという点からも、幅広いレパートリーを学ぶことができた。2月7日に「3つの世紀の合唱作品」と名付けられた成果発表演奏会を行った。そこでは、バロック時代の作曲家であるハインリッヒ・シュッツの宗教作品、20世紀前半のフランスを代表する作曲家の一人であるフランシス・プーランクの合唱作品、そして2018年度に作曲された、現代の日本の作曲家による曲が演奏された。

オペラプロジェクトは今年、モーツァルトが作曲した《フィガロの結婚》の全幕を原語(日本語字幕付き)で上演した。オペラを上演するという機会は教養教育の枠の中ではかなり稀で、参加した学生にとっては貴重な経験になった。3年に一度の開催となっているが、これまでの実績の成果もあり、全3回の公演においてチケットは完売した。

(石井 明)



## II 教育開発関連プロジェクト

### 1 設置科目

#### 1-5 日吉学

—「日吉学」正規科目としての出発—

2013年に実験授業として始まった「日吉学」は、長い試行錯誤の実験授業の期間を経て、ようやく株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座として正規科目となった。その初年度である2019年は秋学期に180分7回の集中講座として開講された。

テーマは「縄文編」。前半は受講生が課題を自ら見出すための学習として、フィールドワークと講義と討論を中心に進めた。まず、縄文時代の日吉の地形を体感すべく、日吉キャンパスの反対側に位置する西別館まで、日吉周辺の高低差を感じながら、途中貝塚の跡を見学しつつ歩いて移動した。西別館では縄文の遺物（貝殻、土器など）の実物を手に取り、縄文の地層から発見された花粉を顕微鏡で観察し、縄文時代の自然環境を安藤広道先生と院生太刀川彩子さんのミニ講義を交え学んだ。

次に「日吉の森で縄文人は何人暮らせるか」という問いに、福田欣司先生の講義とガイドで、日吉の森でどんぐりを収集し、さらに調理して試食し班ごとに算出して発表した。最後に太田弘先生から、プロジェクションマッピングも用いながら縄文時代から現代までの地形の変遷とその要因を学んだ。横浜の地形発達史の第一人者、松田磐余氏（関東学院大学名誉教授）に講義をしていただき、学生は地球規模の気候変動と地形の形成についてより広い視野から学べ、刺激的な質疑の場となった。

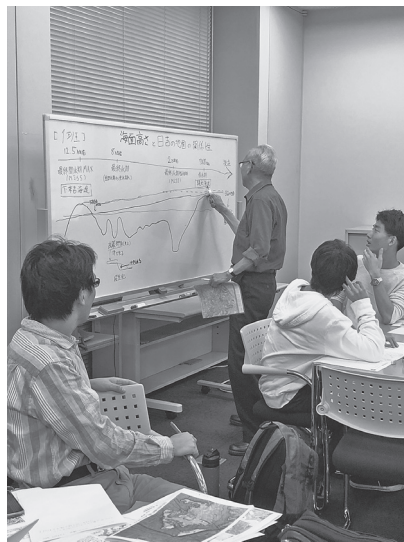
後半はアカデミック・スキルズを学ぶ時間にあてた。テーマの見つけ方を本センターのアカデミック・スキルズ卒業生である高橋慶さんに講義とワークショップで、大出敦先生にはテーマの絞り方をマインドマップを用いてグループワークで発展させていただいた。不破はプレゼンテーションのスライド作りと発表のためのポイントを講義した。

グループ・プレゼンテーションと個人のレポート（4000字）提出という二つの課題をクリアするのは難題ではあったが、3つのグループはそれぞれ、発表において力演、質疑も活発だった。とくに慶應義塾高校生と学部4年



生と社会人大学院生という異色の組み合わせのグループは「日吉の縄文観光」と題して、縄文時代に戻ったら眼前に広がるであろうオーシャンビュー（縄文海進で水位が上昇するため）の魅力を観光に結び付けるというユニークな発表を行った。授業で学んだ詳細を活用しつつ、自由な発想で発展させた発表で、参加者一同を楽しませてくれた。12月3日に最終発表会を開催し、襟川陽一社長と浅野健二郎専務から論文部門とプレゼンテーション部門それぞれに優秀賞が授与された。学生からは「驚き」を「学問」に変えていく授業、「学部学年問わず幅広い学生が深め合う刺激的な場」、「フィールドワークを通して資料を読んでもわからないことに気づき、学ぶ＝読むだけではないと全身で理解した」などの嬉しい声が寄せられた。

（不破有理）



## 2 実験授業

### 2-1 庄内セミナー

2019年度に新元号「令和」となって初めての庄内セミナーは、記念すべき第10回を迎えた。8月29日から9月1日までの日程で、前年度のような大嵐には遭うことなく、山形県鶴岡市を舞台として全行程を無事終了した。様々な学部とキャンパスから学生・院生13名が集まりスタッフ8名との総勢21名が参加した。鶴岡市のご厚意によりマイクロバスで心地よく庄内を移動でき、実り多い4日間を過ごすことができた。

例年と同じ「庄内に学ぶ生命（いのち）」という主題に、今回はあえて「死」を「生」の前に配して「死から学ぶ生」という副題をつけた。誰も経験したことが無く、しかも今後例外なく経験することになる「死」と、そして参加者全員が現在享受している「生」との関係性について、様々な分野の講師陣の講演を伺い、心と身体全体で現地の空気を取り込みつつ考え、グループごとに悩み抜いて議論を纏め上げる。そんな「しんどい」経験の場を、今回の庄内セミナーも駆け足ながら提供できたと思う。

今年度は事前講習会から講演を聴く機会を設け、神田より子氏に庄内の山岳信仰と修験について伺った。早速小グループで話し合ってから全体質疑に入ったので活発なやり取りが生まれた。

そして庄内に到着してからも、死をも含む「いのち」に様々な立場で関わり、熱く何かを追求する人生を歩む方々にお話を伺うことができた。庄内セミナーの10年間の歩みの中で培われたご縁により、快くご協力くださった皆様である。まず庄内が育んできた文化という宝を、酒井家18代当主として未来に伝え続ける酒井忠久様。シルクを現代に生かすというミッションのために邁進している鶴岡シルク株式会社代表取締役大和匡輔様。鶴岡に乗り込んで様々な息吹をそこに運び、事業や研究を育て続ける先端生命科学研究所所長の富田勝先生。毎年セミナー最初の夜に、歴史や文学を切り口として庄内の豊かな死生観・世界観に私たちをいざなって下さる鶴岡総合研究所顧問の東山昭子先生。庄内を今回訪れ、生と死の根源的な問題を学生に投げかけ、共に考えて下さった文学部の斎藤慶典先生。それに庄内の営みを丁寧に紡ぎつつ世界平和のために祈り、織り続ける知憩軒の長南光様。そして最終日に多忙なスケジュールの合間を縫って懇親会場で学生の発表に耳を傾け、フィードバックをして下さった皆川治鶴岡市長。学生はお話下さった皆様と直接に言葉を

交わし、頂いた言葉を受け止めていた。

今回のセミナーも例年同様、過去と現在と未来を縦横に駆け抜ける旅程であった。しかし新機軸として初日は、松ヶ岡開墾記念館の由緒ある本陣で開幕した。「死から学ぶ生」にふさわしく、かつて蚕の命と引き換えに絹糸に新しい命を吹き込んだその場所で、酒井忠久様に酒井家と庄内の歴史をご紹介いただき歴史の重みを肌で感じた。そして大和匡輔様には精力的にビジネスチャンスを作り出す人生について伺った。夜は東山昭子先生に庄内の死生観について語って頂く中で「お山が見ている」という表現を教わった。お山とは私たちを見てくれる月山と先祖代々の御霊を指し、先祖代々の繋がりの中に自分もいると考える土地ならではの表現である。

二日目は、藩校致道館で慶應義塾高等学校の鳥海奈都子先生に論語について解説して頂き、富樫恒文様のご指導で庄内論語の素読を体験した。昼食を頂いた知憩軒では店主の長南光様が完成させた3点の仏像様の美しい織物を裏返して拝見し、日の目を見ない裏の糸こそが、表を支え無くてはならない働きをすると知った。続いて先端生命科学研究所で、富田勝所長にこの20年間の数々の挑戦について伺った後、一気に過去の世界に戻り注連寺で鉄門海上人の即身仏としてのお姿を拝観した。夜は生命科学者の富田所長を再びお招きして現代の生命科学から見た生と死について論じて頂き、哲学者の斎藤慶典先生には死のもつ二面性（生命の存続の一環、私しか担えない唯一のもの）を議論して頂いた。

三日目は羽黒山で滝行も南蛮燻も行い、火を飛び越え生まれ変わる修験体験をした。夜には鶴岡市役所職員で先達の伊藤賢一様のご案内で八朔祭に出かけ本物の修験者達を間近で見た。最終日は各班が15分ずつ「死から学ぶ生」について発表をした。議論の収斂の仕方は様々で、大変に苦労したことが伝わってきた。発表の時間も含め、全日程の中でいかに話し合う時間を確保するかは今後の課題である。セミナー参加前に提出するレポートも材料にして、セミナー中の自分の変化を意識しつつ議論を深めるなどの案が既に挙がっている。

2020年度（以降）は、生活のあらゆる局面で発想の大転換が求められるが、今後の状況を見極めながら知恵を絞っていきたい。

末筆ながら2019年度の庄内セミナーでも鶴岡市役所の本間孝則様をはじめとする皆様、また庄内エ

リアの関係各所の皆様に多大なるご理解、ご協力を賜わった。ここに深く感謝申し上げる。(鈴木亮子)

慶應義塾大学教養研究センター主催

## 第10回 庄内セミナー

『庄内に学ぶ「生命」』 —死から学ぶ生—

庄内セミナーは、山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点にして開催する生命をテーマにした体験型セミナーです。修験体験、即身仏拝願、TTCK 先端生命科学研究所ラボ見学、講義と対話、地元との交流を通して庄内地方の歴史、文化、自然を体験して「生命」をめぐる幅広い「学び」を体験します。

期間：2019年8月29日（木）～9月1日（日）3泊4日  
 場所：山形県鶴岡市（鶴岡タウンキャンパス他）  
 定員：30名 対象：慶應義塾大学学部生・大学院生  
 参加費用：8,000円 ※現地までの交通費は自己負担。現地集合・現地解散です。

■参加申込  
 6月6日（木）～7月11日（木）午前中まで  
 ■詳細・申込  
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/>  
 ■参加者事前講習会・説明会  
 8月1日（木）14：30～17：00  
 来往舎1階シンポジウムスペース




修験体験：羽黒山にて  
 お問合せ：toiwase-lib@adst.keio.ac.jp



## 2 実験授業

### 2-2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新的话题を提供することを目的とした講演シリーズである。2019年度は、「情報の光と影」をテーマに講演を6回開催した。

春学期は、情報の利用に注目した講演3回を開催した。まず、福井健策氏（弁護士）は、法律のない肖像権について講演した。肖像使用の判断基準の例を示し、いくつかの事例を聴衆と一緒に考えることにより、肖像権の難しさを議論した。撮った写真のSNS上での扱いに参考になったといった参加者の意見があった。次に、佐藤優氏（作家・元外務省主任分析官）は、政治・神学など多様な話題をご自身の経験にからめ、そこにおける教養の重要性を説いた。佐藤氏の講演は講演会場に入りきれないほど盛況で、「勉強のモチベーションになった」など学生に対して非常に刺激を与えた。最後に、神武直彦氏（システムデザイン・マネジメント研究科教授）は、様々な利用者によるデータの有効活用を、事例を通して講演した。事例には海外における農業から近隣の小学校におけるスポーツまで多岐にわたり、それぞれどのようなデータをどのように見せて活用したかをとりあげた。ほとんどはデータ活用の良い面であったが、データの帰属先やセキュリティなどの問題についても述べた。

秋学期は、情報に関わる技術に注目した講演3回を開催した。まず、Google 合同会社のソフトウェアエンジニアがご自身のエンジニア職の紹介を通して、ソフトウェア開発に関わる様々な話題を講演した。次に、坂井豊貴氏（経済学部教授）は、仮想通貨であるビットコインをテーマに講演した。ブロックチェーン技術・分散管理・コピー防止など、ビットコインの基本的な仕組みを紹介するとともに、通貨そのものについて議論した。最後に、角田直行氏（ヤフー（株））は、昨今注目されている Deep Learning をはじめ、膨大なデータを利用する AI 技術について講演した。ヤフー（株）で AI 機能を利用しているアプリケーションの紹介を通して、いかに身近なところに浸透しているかを気づかせた。また、単にデータを集めるだけでは問題となり、プライバシーや公平性など気を付けなければいけない事例も紹介した。いずれの講演も、中心は技術ではあったが、基本から応用まで幅広く扱っており、非常に参考になるものであった。

一部の講演は YouTube 上で公開されており、情

報の教養学のホームページ (<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>) から視聴できる。 (高田真吾)

慶應義塾大学教養研究センター主催  
2019年度情報の教養学第1回講演会

サークルの講義、研究活動の、  
そして情報社会で生き抜くための、

# 100万人の「肖像権」90分講座

どこまで出せる？  
どこからNG？

情報社会の進歩で万人が「発信者であり利用者」となった現在、その基幹ルールとも言える2大権利が「著作権」と「肖像権・個人情報」です。今回は、制定法もなく「どこから侵害か」の基準があいまいで、しばしば頭を悩ませる肖像権の「現場で使えるルール」を、90分で考えます。

**福井 健策**  
弁護士  
(日本・ニューヨーク州)  
日本大学芸術学部・神戸大学大学院  
大府学員教授  
1991年東京大学法学部卒  
1992年弁護士登録  
(第二東京弁護士会)

**4月24日**  
18:15~19:45 (水)

講師：福井健策  
弁護士 (日本・ニューヨーク州)  
日本大学芸術学部・神戸大学大学院  
大府学員教授  
場所：日吉キャンパス 来往倉1F  
シンポジウムスペース  
対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)  
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp> @KeioLearning

慶應義塾大学教養研究センター主催  
2019年度情報の教養学第2回講演会

# インテリジェンス における教養の意味

インテリジェンスとは、国家が生き残るために必要な情報のことです。ただし、インテリジェンスの技法は、ビジネス、学術、生活においても応用可能です。インテリジェンスと大学の学知をどう結合するかについて私の考えを述べます。

**佐藤 優**  
作家・元外務省主任分析官

1960年1月18日、東京都生まれ。1978年埼玉県立浦和高等学校卒業。1983年同志社大学神学部を卒業。1985年同志社大学大学院神学研究科修士 (神学専攻)。  
1985年に外務省入省。英国の総領事学校でロシア語を学ぶ。その後、モスクワの日本国大使館、東京の外務省国際情報局に勤務。  
外交官としてのかわらもスクワ国立大学哲学部で神学を講義し、東京大学教養学部で国際問題を講義する。2002年外務省の海外研修に選出され、東京大学神学部で講義。2004年に、自費出版をし、争うも2009年刊行の『戦争の神学』(2013年6月に発行予約期間が満了し、別の言い遣いが力を入れた。この連載を「国際復興」として選んだ。『国際復興』(外務省)のラウンジと呼ばれた。 (新潮社、2005年) が話題になり毎日出版文化賞特別賞を受賞。『自衛する帝国』 (新潮社、2006年) が新潮ドキュメント賞、大塚一ノブフィクション賞を受賞した。現在は、作家活動とともに同志社大学神学部専任教授として国際神学 (キリスト教の神学) を講義する。

**5月8日**  
18:15~19:45 (水)

講師：佐藤 優  
作家・元外務省主任分析官  
場所：日吉キャンパス 来往倉1F  
シンポジウムスペース  
対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)  
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp> @KeioLearning

2019年度情報の教養学第3回講演会 慶應義塾大学教養研究センター主催

# データ駆動型社会の光と影



**神武 直彦**  
慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授  
慶應義塾大学大学院理工学部統計学専攻専攻修了。卒業後、三菱電機株式会社、ロケットの開発業務に携わり、人工衛星と衛星ナビゲーション搭載ソフトウェア独立開発に従事。慶應義塾大学大学院理工学部統計学専攻専攻修了後、学術振興会特別研究員(助手)に就任。2019年度より慶應義塾大学非常勤教授、2018年度より助教授。

専任、Multi-GNSS (Global Navigation Satellite System) Asia Steering Committee Member、ロケーションベースサービス実用委員会、グローバルデータリテラシー情報銀行、スポーツデータなどデータ活用に関する各種委員。アジア工科大学院招聘教授。

政府や企業のみならず、個人や小規模組織からも価値のあるデータを提供することが可能になり、多様なデータを蓄積させて価値を創出するデータ駆動型社会に世界は変化しつつあります。データは価値を生み出す手段であり、様々な利害関係者と共にその仕組みを実現することが重要です。データ駆動型社会の光と影について議論したいと思います。




**6月5日**  
18:15~19:45 (水)

講師：神武 直彦  
慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授  
場所：日吉キャンパス 来往会1F シンポジウムスペース  
対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)  
問い合わせ：toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

@KeioLearning

2019年度情報の教養学第6回講演会 慶應義塾大学教養研究センター主催



# インターネット企業におけるデータとAIの作り方、使い方

**角田 直行**  
ヤフー株式会社 技術戦略本部 T1室 室長  
2005年ヤフー中途入社。Yahoo!地図やYahoo!路線情報、Yahoo!検索などのサービスエンジニア、検索プラットフォームなどのシステム開発を経て2012年よりビッグデータおよびデータサイエンス領域の技術開発に従事。2017年にDeep Learning向けスポン「kukaji」を開発し、Green500第2位を獲得。現在は事業開発に繋がる新しい技術獲得に向け技術調査を行っている。

**11月6日(水)**  
18:15~19:45

講師：角田 直行  
ヤフー株式会社 技術戦略本部 T1室 室長  
場所：日吉キャンパス 来往会1F シンポジウムスペース  
対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)  
問い合わせ：toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

@KeioLearning

2019年度情報の教養学第5回講演会 慶應義塾大学教養研究センター主催

# ビットコインの設計と通貨の新時代



**坂井 豊貴**  
慶應義塾大学経済学部教授  
米国ロチェスター大学 Ph.D. (Economics)  
ゲーム理論を用いた制度設計 (メカニズムデザイン) を専攻。株式会社エニード、データサイエンス・サービス企業として、株式会社Gaudy、元経済学研究所として、学術の実用に関わる。

著書に『多数決を疑う』(経済新聞、高校教科書に採録)、『マーケット・デザイン』(ちくま新書)、『選挙通貨の国史』(ISBN新刊)ほか。  
国際業績一覧： <https://toyotakasakai.jimdo.com/>

私はいまを「ビットコインの時代」の初期だと捉えている。ビットコインが通貨の新たな形態を示して、それに派生してさまざまな暗号資産が現れた時代のことだ。

この講演では、ビットコインの基本的な設計とその意義、そして「ビットコインの時代」について語ってみたい。

**10月30日**  
18:15~19:45 (水)

講師：坂井 豊貴  
慶應義塾大学経済学部教授  
場所：日吉キャンパス 来往会1F シンポジウムスペース  
対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)  
問い合わせ：toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

@KeioLearning

### 3 「学び場」プロジェクト

日吉メディアセンターの1階のカウンターを「学び場」とし、学生が相談員となり、困っている仲間の学生の相手をし、レポートの書き方、論文の構成法、プレゼンテーションの仕方、ノートを取り方など、広く大学の勉強について、サジェッションを与える仕組みを、「学び場」プロジェクトと呼んでいる。同様の制度は他大学にもあると言えはる。だが、管見の限りでは、それらはたいてい大学院生が学部生を指導するかたちのものであろう。しかし「学び場」プロジェクトは違う。教養研究センター設置科目のアカデミック・スキルの既修者が、授業で学んだ論文執筆等のスキルを、より広い範囲の学生に伝えることを目的とし、メディアセンターと連携して続けられている。したがって、相談員の主体は学部生である。メンバーには、豊富な経験を活かして新任の相談員を導く、古参の院生も含まれるが、学部生が主役というのが「学び場」プロジェクトの理念であり、実際でもある。アカデミック・スキルズを学部の1年生で履修して、そのあとすぐ相談員に採用されれば、2年生でカウンターの業務に就く。2年生が後輩や同輩、場合によっては先輩を導く。クラブ活動ではあることに違いないが、大学が公式に制度化しての学習相談で、これほど学年がフラットになっているのは先駆的・画期的のほずで、むろん内容が伴わなければ意味はないが、「学び場」プロジェクトは例年相応の働きをしていると、自負している。また、この企ては、慶應義塾が幕末に私塾として始まり、そこに、先輩塾生が学びながら後輩塾生を教えていた、いわゆる「半学半教」の伝統があったことも踏まえてもいる。初期の義塾の姿を現代的に再生しようとするのが「学び場」プロジェクトでもある。

2019年度の学習相談員は、大学院後期博士課程3名（うち法学研究科2名、社会学研究科1名）、学部4年生3名（法3名、商1名）、3年生4名（文1名、経1名、商1名、理1名）、2年生7名（文3名、経1名、法2名、商1名）、そして法務研究科（法科大学院）1名、以上19名で構成された。院生にも学部生時代にアカデミック・スキルズを履修した者が含まれている。

2019年度の学習相談カウンター業務は、4月から1月の授業期間中の平日午後に行われ、相談件数は、春学期が250件、秋学期が146件、通年で396件であった。2009年度から2018年度までの通年の

相談件数を順に示すと、179件、195件、325件、423件、447件、554件、615件、644件、631件、369件。2018年度に大きな落ち込みがあり、2019年度はそこからやや持ち直したとも分析されうのだが、これについての実際は、2017年度までの数年間、他のカウンターで訊ねられるべき質問が学習相談のカウンターになされたケースも計上されており、2018年度からはそこを除き見かけの全体数が減ったのであって、実質的な相談件数は、恐らくここ10年、400件前後で横ばい状態にあると考えられる。もっと伸ばせるはずで、工夫のしどきであろう。と、思ったら、これをしたためている2020年度には新たな現実が訪れている。いずれにせよ変化が迫られているのであろう。

（片山杜秀）

レポートの書き方が  
分からない...

塾生の

塾生による

塾生のための

私たちが  
相談に  
のります！

学習相談

★日時 4/22(月)～7/19(金)平日13時～18時  
★場所 日吉図書館1F スタディサポート  
★利用方法 窓口へお越しください。  
HPから予約も可能です。

共催 教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部

## 4 実験授業支援制度

### 4-1 機械(マシン)と学ぶくずし字

—はじめの一步—

日時：2019年9月28日・10月19日・11月2日

(台風のために日程変更)

いずれも 13:00~16:15 (2コマ)

会場：1・3回目来往舎中会議室、2回目斯道文庫

AIを使って、昔の人が書いた「くずし字」を読む試みが多方面で行われている。デジタルの世界は文系の人には遠く、システム開発者には文系の研究に必要な作業内容がわからない。その両者を結ぶ架け橋になりたいと、凸版印刷株式会社と斯道文庫の協力を得て、まだ世に出ていないシステムを使用し、くずし字読解と日本の貴重な古典籍について学ぶ実験授業を行った。上記のように、4コマ分を日吉キャンパスにて、システムや通常の辞書を用いて、江戸初期の美しい嵯峨本『船弁慶』や印刷博物館所蔵本でくずし字を読む授業を行い、2コマ分を三田キャンパスにて日本の古典籍の歴史がわかる貴重書を閲覧する機会とし、デジタル画像では未だコピーしきれない本というものがもつ〈情報〉について学んだ。

講師は、宮川真弥氏(天理大学附属天理図書館)、大澤留次郎氏(凸版印刷株式会社「凸版くずし字OCR」開発担当)、佐々木孝浩氏(斯道文庫文庫長)、津田真弓(経済学部教授)。

台風などもあったが、熱心に参加する学生が多く、理系と文系の有意義な半学半教の場になった。

なお、実験授業の性質から、原則塾生の受講のみ



許可したが、学外から多くの問い合わせがあったため、それを受けて2020年2月8日に、「マシンと読むくずし字—デジタル翻刻の未来像」と題し、この実験授業の報告会を兼ねて、AIによるくずし字判読の最前線を確認しつつ、翻刻という作業を研究の基盤とする領域の研究者にとって、今後、紙媒体の時代と何が変わっていくのか、どう向き合っていくのかを考えるシンポジウムを行った。

司会者は上記宮川氏、登壇者は上記大澤氏、津田のほか、社会参加型翻刻プロジェクト「みんなで翻刻」の橋本雄太氏、国文学研究資料館でデジタル関係の事業を担当されている海野圭介氏。システムを体験できることもあり盛況だったシンポジウムは、ライブ配信でも多くの視聴者を得た。記録動画を公開中。<http://user.keio.ac.jp/~sakura/kuzushiji/>

(津田真弓)

**実験授業**

## マシンと学ぶ「くずし字」

(はじめの一步)

江戸時代以前の文字を読む、古典や歴史が好きなお客の喜びをいかに楽しんでもらうか。OCR、AIでありませんか？この技術でくずし字を楽に読むことができます。文系の人にはそれがどんな技術なのか、理系の人には昔の字を読むのがどんなことかわからない、それが問題。そんなハテナを解決して、人間の未来にAIはどうあるべきかを一緒に考えるのが目的です。くずし字に興味がある人、AI技術に興味がある人、国文学の研究者とシステム開発者がコラボしたこの教室で、あなたも機械を育てる実験授業を体験してみませんか？

**授業内容**

- 凸版印刷が新しく開発したシステムを使って、美しい光沢紙本でくずし字を学びます。
- くずし字学習・読解システムとは、OCR・AI技術の現在について考えます。
- 慶應義塾大学の特別文庫で、古い時代の茶殻本を(面)に見て、古典籍の歴史に触れます。

**全3日(各90分授業×2コマ)**

**日吉キャンパス(来往舎)**

Lesson 1・2—9月28日(土) 13:00~16:15  
Lesson 3・4—10月12日(土) 13:00~16:15

**三田キャンパス(斯道文庫)**

Special lesson —10月19日(土) 13:00~16:15

● 受講費 無料。ただし、全日参加できる人のみ、定員30人、事前申し込みが必要です。

● 申込 2019年 8月31日(土)

● 申込先 慶應義塾大学附属天理図書館(天理キャンパス) 天理大学附属天理図書館(天理キャンパス) 国文学研究資料館(三田キャンパス) 慶應義塾大学教養研究センター(三田キャンパス) 慶應義塾大学図書館(三田キャンパス) 日本近世文学会

● 申込先 <http://user.keio.ac.jp/~sakura/kuzushiji/>

**シンポジウム**

## マシンと読むくずし字

### —デジタル翻刻の未来像

デジタルの世界で、昔の人が書いたくずし字を楽に読む技術が注目されています。2019年秋、この最新技術を使って文系・理系の人々の共通の課題を目的に、実験授業「マシンと学ぶくずし字」を開催し、AIやOCR技術が、いかにくずし字(昔の人が使っていた文字)を学ぶ/読む助けになるかを明らかにしました。そこで今回、さらに視点を広げて、この分野の最前線とどんなことが行われているのかを知る機会を提供したいと思います。春秋の語に似ていないものがあるのでしょうか。紙の時代の作家と何が違うのか、またこの技術が発展していくために必要なことは何か、種々の問いに共通する課題を提案。この技術でどんな夢を描くか、一緒に考えたいと思います。

**シンポジウムとデモンストレーション**

司会 宮川真弥(天理大学附属天理図書館)

コーディネーター

津田 真弓(慶應義塾大学) 「実験授業くずし字マシンと学ぶくずし字」報告

大澤 留次郎(凸版印刷株式会社) 「翻刻とAI-OCR」

橋本 雄太(国文学研究資料館) 「市民参加型翻刻の現状と将来」

海野 圭介(国文学研究資料館) 「国文学研究資料館の取り組み(仮)」

**日時**

2020年 2月8日(土)

13:00~17:00

● 会場 慶應義塾大学教養研究センター/津田真弓(慶應義塾大学附属天理図書館)

● 主催 日本近世文学会

● 協賛 慶應義塾大学 日吉キャンパス 来往舎 シンポジウムスペース

● 参加費 自由・無料(ホームページより参加登録をお願い致します)

● 申込先 <http://user.keio.ac.jp/~sakura/kuzushiji/>

詳細はHPで



## 4 実験授業支援制度

### 4-2 フランス事情 I

#### 「フランスとアフリカ」

現在急速に発展しつつあるアフリカ——周知のように、北部から西部、さらに中央部にかけては、大航海時代に端を発するフランス植民地主義の影響で、今日にいたるまでフランスと大きな関わりを保っている。フランスについて授業をする場合、どのようにしてもアフリカを触れないわけにはいかない。植民地主義の歴史については日本語の概説書も多々あるし、20世紀の世紀転換期の黒人芸人「ショコラ」の悲劇は映画にもなっている。1931年の植民地博覧会におけるシュルレアリストたちや、アルジェリア独立戦争でのサルトルの活躍に触れることもできる。しかし、つねにフランスは「見る側」、アフリカは「見られる側」だった。この関係をせめて双方向にできないか。だが、そのような作業は担当教員の力量を大きく超えてしまう……そのような考えから、2019年度春学期、総合教育科目「フランス事情I」において「教育メソッド開発のための実験授業支援制度」の支援を受けて実験授業を行なった。

具体的には、「フランスとアフリカ」を主題とした計4回にわたる公開講座を開催した。第一回（4月24日）は、中村隆之氏（早稲田大准教授）に、カリブ海の仏領地域の歴史と現在についてお話しいただいた。カリブ海はアフリカではない……が、アフリカから奴隷として連れて行かれた人々はまさしくこのカリブ海のプランテーションにいたわけで、その起源に触れないわけにはいかなかった。第二回（6月3日）は西岡淳氏（帝京大教授）からジブチについて。西岡氏は駐仏日本大使館参事官や初代駐ジブチ大使を務めた元外交官で、ジブチという小さな国が、ふだん日本からは見えてこないが、どれほどの重要性をもっているかを教えてくださいました。第三回（6月26日）は、日本におけるアルジェリア研究の第一人者である私市正年氏（上智大名誉教授）からアルジェリアの現代史についての講演をいただいた。第四回（7月17日）は、日本学術振興会海外特別研究員の中尾沙季子氏からセネガルの現

総合教育科目「フランス事情I」×教養研究センター公開講座

## フランスとアフリカ



2018年のサッカーW杯で、フランスは20年ぶりの優勝を果たしましたがそのメンバーにいわれる「アフリカ系」の選手が多かったことは多くの注目を集めました。一方で、2015年以降続出した「テロ事件」の被害者の中には「アフリカ系」の犠牲者も少なくありません。そのほか、実際にアフリカに渡ったことがないままにアフリカを扱ったような現在のフランスには「アフリカ系」と言われる人々がかなりの割合で居住しています。いつから、どのようにしてこのような状況が生まれたのか、「フランス」と「アフリカ」とはどのような関係にあるのでしょうか。この公開講座は、総合教育科目「フランス事情I」と連動し、実際にアフリカで活動してきた研究者・外交官の方をお招きし、「フランスとアフリカ」についての関係についてお話しいたします。

第1回 4月24日（水）4限  
中村隆之氏（早稲田大准教授）  
カリブ海から見たフランスとアフリカ

第2回 6月1日（月：補講日）4限 \*曜日が異なります  
西岡淳氏（帝京大教授・元ジブチ大使）  
日本の外交から見たアフリカとフランス

第3回 6月26日（水）4限  
私市正年氏（上智大教授・日本アルジェリア協会理事）  
アルジェリアから見たフランス

第4回 7月17日（水）4限  
中尾沙季子氏（日本学術振興会海外特別研究員）  
西アフリカから見たフランス

対象：教員・学部生（フランス事情I履修者以外も参加可能）  
事前申し込み不要・入場無料

お問い合わせ：教育学部 教養課程 (03)5342-2320

状について。若手の研究者だが、セネガルに何度も足を運んでおり、現在の西アフリカの生の様子を伝えていただいた。

各回ともに、講師の方によるアフリカでの実際の経験を踏まえた講演で、内容的にも非常に充実したものだった。参加学生のコメントからも通常の授業では味わえない貴重な話から新鮮かつ多角的な理解を得た様子が伝わった。質疑応答の時間には、複数の質問の手が挙がるなど、きわめて盛況であった。

こうした授業形態は、一方的になりがちな講義形式の授業に対し、複眼的なアプローチを間近に見られるという利点があると実感できた。いわゆるオムニバス形式の授業では論点が散漫になることがままあるが、今回ご支援いただいたことで、通常の講義とゲストによる講演とを有機的に混合させる授業形態を試みることであったように思われる。

（渡名喜庸哲）

# 1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会 (HAPP) は従来、春学期に新入生歓迎行事を、秋学期には塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催・開催してきた。2018年度からはしかしながら、活動の方針を変更し、主に春学期に開催する、委員会が主体となって催すイベントについては「新入生歓迎行事」という位置付けは行わなくてもよいとした。この場合、キャンパスのコミュニティー全体に対して行う企画という性格を持たせることにし、イベント名称は、「日吉行事企画委員会 (HAPP) 企画」となる。「新入生歓迎行事」と「日吉行事企画委員会 (HAPP) 企画」のどちらにおいても、継続性の強い催し物を優先して開催していくことになり、2019年度においてもこれが継続された。

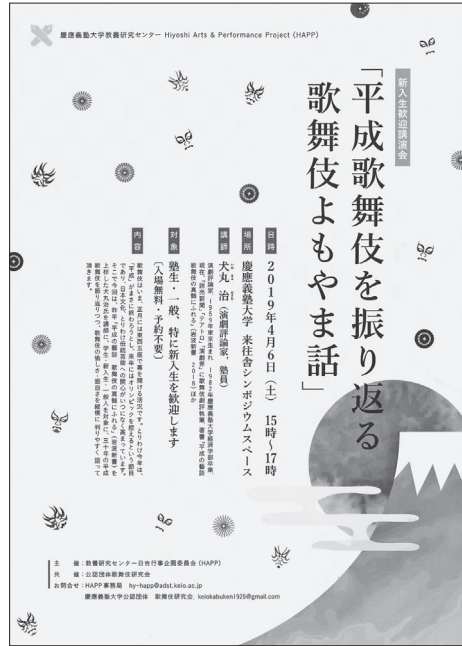
2019年度のHAPPが自主的に企画した行事は7つであった。これらは、毎年恒例となっている、舞踏の公演、塾名誉教授や著名者による講演会、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」、日吉メディアセンターの中でのコンサートだった。

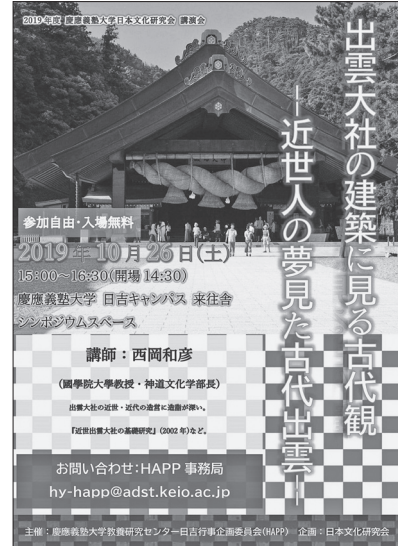
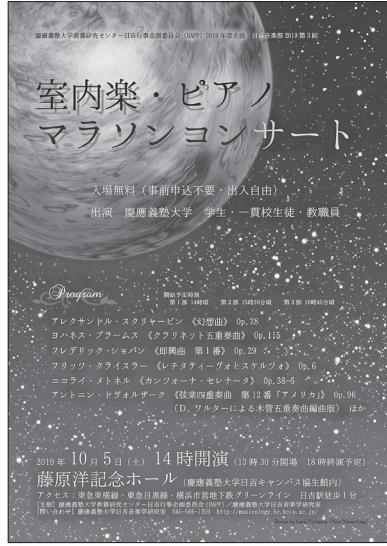
2019年度秋学期においては、従来通り、春学期中に公募を行い、審査を経て採択を決定した企画の実行を核とした活動を展開した。しかしながら2019年度は、採択に至った企画の数が少なく、教員企画1件、学生企画が1件という結果だった。前者は、国連UNHCR 難民映画祭の学校パートナーズとして、10月から11月にかけて行われた「難民映画週間2019」である。数年にわたり継続的に行ってきている、展示、講演、映画上演が含まれたイベントであった。後者は10月から12月という長期にわたる、「慶應義塾南三陸プロジェクト活動報告(2011～現在)」と題された展示であった。タイトルにあるように、「南三陸プロジェクト」が一区切りを迎えたことを記念し、これまでの活動を紹介する展示となった。

2019年度のHAPPによる行事は、いずれも活気のある催しとなり、地域住民を含むたくさんの来場者にお越しいただいた。HAPPの活動が、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということに確実に貢献していることが確認できた。

HAPPの活動については、HAPPのホームページ (<http://happ.hc.keio.ac.jp/>) をご覧いただきたい。

(石井 明)





## 2019年度 HAPP 企画

No.	企画名	日程
1	平成歌舞伎を振り返る 歌舞伎よもやま話	4月6日
2	上杉満代舞踏公演 命	5月24日
3	ライブラリーコンサート 2019 春 in 日吉 —図書館がコンサートホールになる2日間—	5月24日、31日
4	桂吉坊にきく藝—古典芸能の中の落語— (ことばの世界V)	5月29日
5	吉増剛造 後輩たちに語る —慶應義塾のこと、新作映画『幻をみるひと 京都の吉増剛造』のことなど—	5月30日
6	日吉音楽祭 2019	7月6日、13日、10月5日
7	慶應義塾南三陸プロジェクト活動報告 (2011～現在)	10月11日～12月11日
8	出雲大社の建築に見る古代観 —近世人の夢見た古代出雲—	10月26日
9	KEIO REFUGEE WEEK 2019	展示 10月28日～11月15日 上映・講演会 11月1日、7日、8日、15日

## 2 日吉キャンパス公開講座

前身の「横浜市民大学講座」から数え 46 回目を迎えた 2019 年度「日吉キャンパス公開講座」を 9 月 28 日から 11 月 30 日の日程で開催した。

2019 年度のテーマについては、4 月 9 日に実施した公開講座運営委員会において、委員長の提案を元とした「出口戦略とその先の未来」に決定し、講師陣については委員長提示の素案を元に、委員からも多数の提案があり、委員会として候補者リストを作成し、順次講演依頼を行った結果、後述のような陣容となった。

開催にあたり、テーマ概要として示した文章は以下の通りである（この部分のみ原文のままとするため、丁寧語で記すこととする）。

人生 100 年時代を迎え、60 歳（65 歳）定年後であっても、相当長い人生が待ち構えています。更にプロスポーツ選手であれば、サラリーマンよりも早く第二の人生が訪れ、それまでとは全く異なった生き方をしなくてはならないこともしばしばであると想像します。

幸運に恵まれ健康に生きることができたとしても、人生の中における「ある時代」の後の出口を一度も描くことなしに、人生を終えられることは、もはやないようにも感じられます。LED が白熱電球に取って代わったように、イノベーション（社会の変化）は既得権益の終焉（同じやり方が通用しにくくなること）にも相当し、それらの賞味期限はどんどん短くなっているようにも思います。

ある事象をどう終わらせるか、終わった後どうすべきか。出口を迎えるにあたって、それまでに培ったことを派生させ、どのように備え次を迎えるか。「出口戦略」を広義にとらえ、様々な切り口から皆様と共に考察したいと考えております。

前年度より、それまでの 8 日間 16 講師の構成から、受講料は据え置きのまま、5 日間 10 講師としたにもかかわらず、過去最多となる受講申込み数となった。また、新たな試みとして、初日の講演前に公開講座全体の趣旨説明をする時間を設けた。

実施日・講演タイトル・演者は以下の通りである。

### 9 月 28 日

3 時限 「大学スポーツは可能性の宝庫！ - 日本ラグビーの始祖・慶應大学ラグビー部が「法人化」した理由とその先の未来 -」  
和田康二（一般社団法人慶應ラグビー倶楽部理事、慶應義塾体育会蹴球部（ラグビー部）・ゼネラルマネージャー）

4 時限 「“現代実学” 獲得への道 - 2020 英国チーム受入れを通じて」  
稲見崇孝（慶應義塾大学体育研究所専任講師）

### 11 月 2 日

3 時限 「日本人の出口戦略」  
岡崎良介（金融ストラテジスト、日経 CNBC コメンテーター）

4 時限 「天皇制の『出口戦略』 - 福澤諭吉・小泉信三が描いた『立憲君主』の未来 -」  
都倉武之（慶應義塾福澤研究センター准教授）

### 11 月 9 日

3 時限 「家族と憲法 - 同性婚訴訟の『出口戦略』」  
駒村圭吾（慶應義塾常任理事）

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座

「全 5 日」

# 出口戦略とその先の未来

2019年  
9月28日(土)  
▼  
11月30日(土)

**講座内容** ① 3 時限目 (13:00~14:30) ② 4 時限目 (14:45~16:15)

<p>9/28 (土)</p> <p>① 「大学スポーツは可能性の宝庫！ - 日本ラグビーの始祖・慶應大学ラグビー部が「法人化」した理由とその先の未来 -」</p> <p>② 「現代実学」獲得への道 - 2020 英国チーム受入れを通じて -</p>	<p>寺沢和洋 日吉キャンパス公開講座運営委員長</p> <p>和田康二 慶應義塾大学ラグビー部理事 慶應義塾体育会蹴球部（ラグビー部） ゼネラルマネージャー</p> <p>稲見崇孝 慶應義塾大学体育研究所専任講師</p>
<p>11/2 (土)</p> <p>① 日本人の出口戦略</p> <p>② 天皇制の『出口戦略』 - 福澤諭吉・小泉信三が描いた『立憲君主』の未来 -</p>	<p>岡崎良介 日経 CNBC コメンテーター</p> <p>都倉武之 慶應義塾福澤研究センター准教授</p>
<p>11/9 (土)</p> <p>① 家族と憲法 - 同性婚訴訟の『出口戦略』</p> <p>② 現代中国政治の新たな正統性源</p>	<p>駒村圭吾 慶應義塾常任理事</p> <p>呉茂樹 慶應義塾大学政治学専攻准教授</p>
<p>11/16 (土)</p> <p>① 人は何のために生きているのか - 「節制のため」の心理学を学ぶ</p> <p>② イノベーションが生み出す未知の世界 - 宇宙ビジネス入社の現在から -</p>	<p>安西祐一郎 日吉キャンパス公開講座運営委員長</p> <p>新谷実保子 慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座運営委員長</p>
<p>11/30 (土)</p> <p>① 人間中心社会の終焉 - ひととロボットの暮らしから未来社会へ</p> <p>② きこやかびの生き方から探る出口戦略</p>	<p>太田智英 慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座運営委員長</p> <p>積谷大河 慶應義塾大学政治学専攻准教授</p>

\*中心内容以外の事項により、講師の都合、日程の変更、あるいは講師自身の休職となる場合があります。休職の場合は可能な限り事前にお知らせいたします。変更については下記ホームページにてお知らせいたします。

\*参加費：無料。交通費やその他の費用は各自で負担してください。本講座の開催は、当日の午前に 03:00 迄に決定いたします。休演日については下記福澤研究センターホームページにてご確認ください。

**募集要項** (詳細もご覧ください)

募集対象：社会人ほか  
募集定員：350 名（単発前席受付・定員に達し次第、締め切りとさせていただきます。）  
会場：慶應義塾大学日吉キャンパス内  
受付期間：2019 年 7 月 25 日 - 9 月 13 日（必着）  
募集料：800 円（全 5 日）  
申込方法：募集要項のうえ、① 福澤研究センターホームページ、② メール、③ 電話、④ FAX、⑤ のいずれかの方法でお申し込みください。  
申込受付：申し込み受付後、申込先情報をご連絡致します。受講料の納入を完了した受講者となり、前定日までに受講料を前払い納付にご入金ください。  
特 典：期間中、日吉図書館の利用が可能となります。（貸出しは不可）。  
全 5 日間、当日は上野原の有志者（福澤本館）慶應義塾大学福澤研究センター運営（書籍）1冊を授与いたします。

●受講者の方々にかかわる個人情報に関する事項  
慶應義塾大学福澤研究センター主催「日吉キャンパス公開講座」は、講座の中心となる個人情報は「日吉キャンパス公開講座」を告知するセンターからの告知のみに利用し、十分プライバシーに配慮し、厳重管理いたします。講座の進捗を踏まえた受講者の進捗状況の把握を行う場合があります。本人の同意なく第三者へ提供することはありません。

慶應義塾大学教養研究センター  
日吉キャンパス公開講座事務局（サンバートナース（株）内）  
〒104-8303 東京都港区赤坂 2-1-1  
Tel. 03-6452-6952 Fax. 03-6452-1482 E-mail: hse2019@tds.kriao.ac.jp  
URL: http://03vars.hc.kriao.ac.jp/ 教養研究センター | 検索

4 時限 「現代中国政治の新たな正統性源泉は？」  
呉茂松（慶應義塾大学経済学部准教授）

11 月 16 日

3 時限 「人は何のために生きているのか  
- 『何のため』の心理学と哲学」  
安西祐一郎（独立行政法人日本学術振興会  
顧問、元慶應義塾長）

4 時限 「イノベーションが生み出す未知の世界  
- 宇宙ビジネス法務の視点から -」  
新谷美保子（弁護士、一般社団法人スペース  
ポートジャパン理事、JAXA 新事業促  
進部非常勤招聘職員）

11 月 30 日

3 時限 「人間中心社会の終焉 - ヒトとロボット  
が暮らす未来社会 -」  
太田智美（慶應義塾大学大学院メディアデ  
ザイン研究所リサーチャー、音楽家、記  
者、情報処理学会会誌編集委員）

4 時限 「きのこやかびの生き方から探る出口戦略」  
糟谷大河（慶應義塾大学経済学部准教授）

（オール慶應）

塾外5名（和田先生、岡崎先生、安西先生、新谷先生、太田先生）、塾内5名の陣容で、スポーツ、経済・金融・歴史・憲法・国際政治・哲学・宇宙・ビジネス・社会科学・生物等の各分野にまつわる「出口戦略とその先の未来」についての講演がなされた。本年は、塾外の講師も慶應義塾出身者で固め、オール慶應で臨んだ公開講座となった。

受講者アンケートからは「普段得られない知見に触れ、刺激を受けた」「幅広い講座テーマで良かった」との感想や貴重な意見も多くいただき、前年度に引き続き90%以上の受講者から「満足」との回答を得た。講師の先生からも「(受講者から) 圧を感じる」「あの人数には驚いた」等、受講者の皆様の熱心さに大変満足とのお声もいただいた。今後も、アンケート等を参考に改善していける点は積極的に改善し、魅力のある統一テーマを選定、文理両分野の教員が多数在籍する日吉キャンパスの特徴を活かし、日常的で身近な話題から最先端の研究開発の話題まで分野横断的な講座を今後も展開していればと考えている。

（寺沢和洋）



岡崎良介氏



安西祐一郎氏



新谷美保子氏



講義風景

## 3「創造力とコミュニティ」 研究会

2018年度に発足した「創造力とコミュニティ」研究会では、地域コミュニティの活性化に参加するアーティストや個人・団体の実践を考察するために、2019年度も引き続き、創造力を通して活動を展開、あるいはこれから参画しようとしているアーティストやNPO団体の方々を話題提供者や講師として招き、話を聞くと同時に参加者による話し合いの場を設けた。本年度は以下の4回の研究会を開催した。

2019年9月25日 第4回 アーティストとコミュニティ～ダンサーの私がコミュニティを考えるわけ

話題提供者：ストウミキコ（ダンサー・振付家）、さやか（JAZZダンサー・A.d.S.L. (= aggressive dance style of London) メンバー）

すでにコミュニティダンスの振付家として、中学校などの教育機関でダンス教育を展開しているストウミキコ氏の話を知ると同時に、プロのダンサーとして活躍しながらも、今後コミュニティダンスに取り組もうとしているさやか氏をお招きして、どうしてダンスを通じてコミュニティに働きかけようと思ったのか、そのきっかけと活動の内容について伺った。そこで提起された問題の一つは、芸術教育は、プロの育成のみならず、今後はコミュニティへの貢献を念頭に置いた内容も必要になってくるのではないかと視点が広がった。同時に芸術教育の中でのダンスの位置づけの低さについても指摘された。コミュニティとの関係において、高等教育でも専門的な学が必要とされる点がディスカッションの中で提起されたが、リベラルアーツの中での芸術教育やダンス教育についても今後さらに考察する必要があるだろうことが、明るみに出た。

2019年10月30日 第5回 アーティストとコミュニティ～音楽家の私がコミュニティを考えるわけ

話題提供者：厚地美香子（NPO法人「あっちこっち」代表）、岩下真麻（ピアニスト）

前回のダンスに続いて、5回目は音楽家をお招きしての研究会である。今回は、若手の音楽家たちをコミュニティ活動に派遣しているNPO法人の代表者で本人もピアニストの厚地美香子氏とそのNPOのもとでコミュニティ活動を行っている若手ピアニストの岩下真麻氏の話を知った。二人ともクラシック音楽の高等教育を受けた後に、コミュニティ活動

を行っているが、その裏には、高等教育を受けても実際にプロとして活躍できる道が非常に狭いという問題がある。つまり若手アーティストたちの支援もまた、コミュニティ活動の一環と言えよう。今回の研究会では「アーティスト」とは、また「芸術教育」とは、という基本的なテーマについて活発な討論が会場で展開された。ひいてはそれは「芸術」とは何か、芸術はコミュニティに寄り添う必要があるのか、という究極の問題ともなる。議論の末に時間切れとなってしまったものの、前回に引き続き、教育の現場での芸術の意義について考えさせられる貴重な研究会であった。

2020年1月31日 第6回「おいしい」はアートだ！～食とコミュニティについて考える

話題提供者：横山千晶（兼モデレーター／法学部・居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会代表）、シャー・真理子（パキスタン料理研究家・食のアクティビスト）

6回目となる研究会では、コミュニティと「食」について考察した。毎週火曜日に石川町で運営されている居場所「カドベヤで過ごす火曜日」では、ともに料理し、共に食えることが重要な活動の一環となっている。食卓を囲むということは小さなコミュニティの創設の場を提供する。その一方で、様々な理由で健康的な食事がとれない人々、共に食事をする人がいない人々、食事を作る環境にない人々など、健康的な食のコミュニティに参加できない人々が多数いる。火曜日のカドベヤの活動は、そのような人々に食のコミュニティを提供することでもある。同時に安全な素材で料理すること、ベジタリアンやビーガンなど、それぞれの食の特性に寄り添った食事の提供など、食を考えることは食べてもらう人に思いを寄せる行為でもある。このように横山の提供した話題では、「カドベヤ」での活動を通して、食とコミュニティの強いつながりについて触れた。続くシャー・真理子氏の話は、そのようなコミュニティ創設の一つの例として、氏が長年過ごしたパキスタンにおいて、食と料理すること、提供することが、いかに重要な役割を果たしているのかについて説明がなされた。

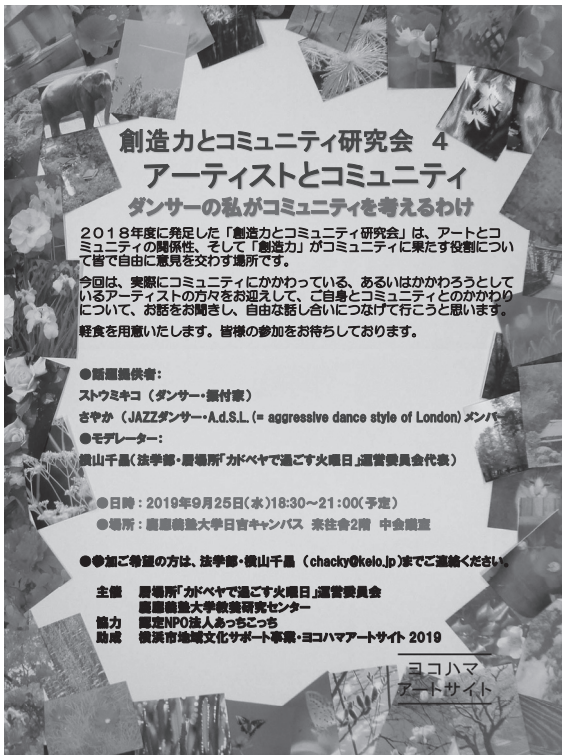
今回の研究会では、実際にパキスタン料理研究家でもあるシャー氏が様々なパキスタン料理を提供してくださり、会場で味わうことで、私たちも食のコ

コミュニティの一員となることが可能となった点も特記しておきたい。

## 2020年3月24日 第7回 わたしと「コミュニティ」なるもの

残念ながら、2月27日に開催予定だった横浜市のアートとコミュニティ活動の委託事業を行っているNPO法人STスポットの代表者をお呼びしての研究会は、COVID-19（コロナウィルス）感染予防のために延期となってしまった。2019年度最後の回として企画されていた2020年3月24日の会合は、今までの話題提供者をお呼びして、全体ディスカッションを行う予定でいたが、今回はその回のみ、カドベヤで開催した。コロナウィルスの感染予防のために、掃除やアルコール消毒、手洗い、うがい、換気、そして十分な距離を取って行った会合には10名以上の参加者が集まり、活発な意見交換が行われた。2020年4月7日の緊急事態宣言がまだ発令される前のことではあったが、その可能性も念頭に置きながら、どうやってコミュニティが今後この危機を乗り越えていくのかについての予想を各自が披露した。

まだその正体も影響もはっきりとはわからないウィルスの存在は、今後私たちのコミュニティをどう変えていくのか。その中で私たちはどのように自らがかわるコミュニティをまさに「創造的」に存続させていくのか。そのための解決はどうしてもまだ見えてこないものの、今後もつながっていくという各自の意思を感じさせる意見交換の場となった。



**創造力とコミュニティ研究会 4**  
**アーティストとコミュニティ**  
**ダンサーの私がコミュニティを考えるわけ**

2018年度に発足した「創造力とコミュニティ研究会」は、アートとコミュニティの関係性、そして「創造力」がコミュニティに果たす役割について皆で自由に意見を交わす場所です。

今回は、実際にコミュニティにかかわっている、あるいはかかわろうとしているアーティストの方々をお迎えして、ご自身とコミュニティとのかわりについて、お話を聞き、自由な話し合いにつなげて行こうと思います。軽食をご用意いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

●開催提供者:  
ストウミキコ (ダンサー・振付家)  
さやか (JAZZダンサー・A.d.S.L. (= aggressive dance style of London) メンバー)  
●モデレーター:  
横山千晶 (法学部・履修所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会代表)

●日時: 2019年9月25日(水)18:30~21:00(予定)  
●場所: 慶應義塾大学日吉キャンパス 奈往舎2階 中会議室

●●ご希望の方は、法学部・横山千晶 (checky@keio.jp)までご連絡ください。

主催 履修所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会  
慶應義塾大学教養研究センター  
協力 NPO法人あっちこっち  
後援 横浜市地域文化サポート事業・ヨコハマアートサイト 2019

ヨコハマ  
アートサイト

開催されたどの会でも大学教職員のみならず、一般の参加者も集めて活発なディスカッションが展開された。COVID-19の影響は今後、大学やその他のコミュニティにどのような影響を与えていくのだろうか。今後も研究会を通じてコミュニティ存続の現場に携わる人々の意見を聞き、ともに各コミュニティの現在と未来を見守っていききたい。

(横山千晶)

## 1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成14年7月2日制定

改正 平成17年 6月 3日 平成18年 5月 9日  
 平成20年 5月 1日 平成20年11月 4日  
 平成21年12月15日 平成23年 3月29日  
 平成26年12月 5日

(設置)

第1条 慶應義塾大学（以下「大学」という。）に、慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts。以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 3 教養研究活動への助成および支援
- 4 教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信
- 5 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 研究員 若干名
- 5 事務長
- 6 職員 若干名

② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

⑤ 研究員は、特任教員、研究員（有期）または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派

遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。（運営委員会）

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉 ITC 所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めた者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムに関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに関する事項
- 7 その他必要と認める事項

(コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネート・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事



務長とともに、センターの事業を推進する。

- ③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託することができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

- 1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。
- 2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。
- 3 特任教員および研究員(有期)については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。
- 4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程(昭和51年8月27日制定)」の定めるところによる。
- 5 事務長および職員については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

- ② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

- ③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

- ④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

- 1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究
- 2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究または共同研究
- 3 特定研究：センターが企画、立案した研究

- ② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

- ② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程(昭和46年2月15日制定)」の定めるところによる。

- ② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

- ③ 外部資金の取扱い等については、学術研究支援部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

- ① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

- ② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則(平成17年6月3日)

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則(平成18年5月9日)

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則(平成20年5月1日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成20年11月4日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成21年12月15日)

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則(平成23年3月29日)

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則(平成26年12月5日)

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

## 2 運営委員会委員

2019年4月1日～2020年3月31日在籍者  
 第9期（2017年10月1日～2019年9月30日）  
 第10期（2019年10月1日～2021年9月30日）

## 教養研究センター担当常任理事

青山藤詞郎

## 教養研究センター所長

小菅隼人

## 教養研究センター副所長

片山杜秀

高橋宣也

荒金直人

瀧本佳容子（2019年10月1日から）

## 教養研究センター事務長

大古殿憲治

## 文学部長

松浦良充

## 経済学部長

池田幸弘

## 法学部長

岩谷十郎

## 商学部長

榊原研互（2019年9月30日まで）

岡本大輔（2019年10月1日から）

## 医学部長

天谷雅行

## 理工学部長

岡田英史

## 総合政策学部長

河添健（2019年9月30日まで）

土屋大洋（2019年10月1日から）

## 環境情報学部長

濱田庸子（2019年9月30日まで）

脇田玲（2019年10月1日から）

## 看護医療学部長

小松浩子（2019年9月30日まで）

武田祐子（2019年10月1日から）

## 薬学部長

金澤秀子（2019年9月30日まで）

三澤日出巳（2019年10月1日から）

## 文学部日吉主任

坂本光

## 経済学部日吉主任

柏崎千佳子

## 法学部日吉主任

奥田暁代

## 商学部日吉主任

種村和史（2019年9月30日まで）

大矢玲子（2019年10月1日から）

## 医学部日吉主任

井上浩義

## 理工学部日吉主任

萩原真一（2019年9月30日まで）

井上京子（2019年10月1日から）

## 薬学部日吉主任

田村悦臣（2019年9月30日まで）

金澤秀子（2019年10月1日から）

## 体育研究所所長

石手靖

## 日吉メディアセンター所長

横山千晶

## 日吉ITC所長

小林宏充

## 外国語教育研究センター所長

七字真明

## 自然科学研究教育センター所長

金子洋之（2019年9月30日まで）

井奥洪二（2019年10月1日から）

## 日吉研究室運営委員会委員長

不破有理（2019年9月30日まで）

大出敦（2019年10月1日から）

## 日吉キャンパス事務長

蠣崎元章（2019年10月31日まで）

國分紀嗣（2019年11月1日から）

## 日吉学生部事務長

千葉徹

## 日吉メディアセンター事務長

長島敏樹

## 日吉キャンパス事務センター課長

川田孝征

## 日吉行事企画委員会（HAPP）委員長

石井明

## 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

寺沢和洋

## 3 組織構成員

2019年4月1日～2020年3月31日

所員：194名（2020年3月31日現在）

所長：小菅隼人（理）

副所長：片山杜秀（法）

高橋宣也（文）

荒金直人（理）

瀧本佳容子（商・2019年10月1日から）

コーディネーター：

新島進（経）、武藤浩史（法）、種村和史（商）、  
西尾宇広（商）、鈴木亮子（経）、高山緑（理）、  
鈴木晃仁（経）、不破有理（経）、徳永聡子（文）、  
渡名喜庸哲（商）、大野真澄（法）、高田眞吾（理）、  
神武直彦（SDM研究科）、石井明（経）、寺沢和洋（医）、  
大古殿憲治（教養セ事務長）、

萩原眞一（理・2019年9月30日まで）、

坂本光（文・2019年10月1日から）、

蠣崎元章（キャンパス事務長・2019年10月31日まで）、

國分紀嗣（キャンパス事務長・2019年11月1日から）

広報担当：高橋宣也（文）

日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：石井明（経）

委員：高橋宣也（文）、大出敦（法）、竹内美佳子（商）、  
津田眞弓（経）、小菅隼人（理）、小林拓也（理）

石手靖（体研）、徳村光昭（保セ）、

蠣崎元章（キャンパス事務長・2019年10月31日まで）、

國分紀嗣（キャンパス事務長・2019年11月1日から）、

川田孝征（運営サ）、

難波陽平（運営サ・2019年5月31日まで）、

周藤有実（運営サ・2019年6月1日から）、

友田明文（学生部）、五十嵐暁俊（学生部）、

長島敏樹（日吉メディアセ）、

長野裕恵（日吉メディアセ・2019年10月31日まで）、

今井星香（日吉メディアセ・2019年11月1日から）、

鈴木都美子（教養セ）

極東証券寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、荒金直人（理）、  
瀧本佳容子（商・2019年10月1日から）

「生命の教養学」企画委員会

委員長：西尾宇広（商）

委員：坂内健一（理）、高山緑（理）、荒金直人（理）、  
伏見岳志（商・2019年9月30日まで）、

沼尾恵（理・2019年9月30日まで）、

松原輝彦（理・2019年9月30日まで）、

清水史郎（理・2019年10月1日から）、

有川智己（経・2019年10月1日から）、

川添美央子（商・2019年10月1日から）、

宮本万里（商・2019年10月1日から）

白寿生科学研究所寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

荒金直人（理）、石井明（経）

瀧本佳容子（商・2019年10月1日から）

コーエーテックモホールディングス寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

荒金直人（理）、不破有理（経）

瀧本佳容子（商・2019年10月1日から）

日吉学企画委員会

委員長：不破有理（経）

委員：小菅隼人（理）、片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

安藤弘道（文）、福山欣司（経）、長田進（経）、

大出敦（法）、有川智己（経）、

神武直彦（SDM研究科）、都倉武之（福澤研究セ）、

阿久澤武史（塾高）、太田弘（元普通部）

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：寺沢和洋（医）

委員：小菅隼人（理）、石井明（経）、

山下一夫（理）、高橋宣也（文）、

有川智己（経）、酒井規史（商）、

神武直彦（SDM研究科）、野口和行（体研）

蠣崎元章（キャンパス事務長・2019年10月31日まで）、

國分紀嗣（キャンパス事務長・2019年11月1日から）

庄内セミナー実行委員会

委員長：鈴木亮子（経）

委員：小菅隼人（理）、荒金直人（理）、鳥海奈都子（塾高）、  
斎藤慶典（文・2019年11月30日まで）、

森吉直子（商・2019年11月30日まで）、

呉茂松（経・2019年11月30日まで）、

瀧本佳容子（商・2019年12月1日から）

## 2019年度庄内セミナースタッフ

鈴木亮子(経)、小菅隼人(理)、荒金直人(理)、  
斎藤慶典(文)、呉 茂松(経)、鳥海奈都子(塾高)

## 教養研究センター事務局

大古殿憲治(事務長)

鈴木都美子、池本晶子、大澤 綾

傳 小史(2019年5月31日まで)、

富田いづみ(2019年6月1日から)

## 4 2019年度の主な活動記録

Date	Events
4	<p>4日 教養研究センター設置科目全体ガイダンス</p> <p>6日 HAPP企画「平成歌舞伎を振り返る 歌舞伎よもやま話」</p> <p>8日～12日 設置科目クラス別ガイダンス</p> <p>16日 基盤研究 文理連携プロジェクト研究会「医学史と生命科学論」 症例誌と文学と社会：医学と様式と歴史の複合</p> <p>19日 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第8回</p> <p>23日 読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第4回</p> <p>24日 第1回情報の教養学「サークルの、講義の、研究活動の、そして情報社会で生き抜くための、100万人の「肖像権」90分講座 どこまで出せる？どこからNG?」</p> <p>24日、6月3日、6月26日、7月17日 実験授業支援「総合教育科目『フランス事情Ⅰ』特別公開講座『フランスとアフリカ』(全4回)」</p>
5	<p>7日 第1回所長・副所長会議</p> <p>8日 第2回情報の教養学「インテリジェンスにおける教養の意味」</p> <p>15日 学会・ワークショップ等開催支援「公開シンポジウム『北朝鮮とどう向き合うか』」</p> <p>15日 ニュースレター 34号刊行</p> <p>17日 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第9回</p> <p>21日 基盤研究 文理連携プロジェクト研究会「医学史と生命科学論」 ラトウルの科学論と「物の歴史性」を非還元性の原則から捉え直す</p> <p>24日 HAPP企画「上杉満代舞踏公演 命」</p> <p>24日、31日 HAPP企画「ライブラリーコンサート 2019春 in 日吉 一図書館がコンサートホールになる2日間一」</p> <p>25日 学会・ワークショップ等開催支援「ワークショップ『日本における西洋古典受容』」</p> <p>読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第5回</p> <p>28日 HAPP企画「桂吉坊にきく藝 一古典芸能の中の落語—(ことばの世界 no.5)」</p> <p>29日 HAPP企画「吉増剛造 後輩たちに語る一慶應義塾のこと、新作映画『幻をみるひと 京都の吉増剛造』のことなど一」</p> <p>30日</p>
6	<p>5日 第3回情報の教養学「データ駆動型社会の光と影」</p> <p>8日～9日 学会・ワークショップ等開催支援「日本ロレンス協会第50回記念大会」</p> <p>11日 第1回コーディネート・オフィス会議</p> <p>14日 学会・ワークショップ等開催支援「セミナー『幸せの国ブータン～その政治と社会～』」</p> <p>15日 学会・ワークショップ等開催支援「日本エミリー・ディキンソン学会第34回大会」</p> <p>19日 第二十五弾「研究の現場から」見上公一</p> <p>21日 学会・ワークショップ等開催支援「シンポジウム『キャンパスにおける性犯罪を防止するには』」</p> <p>25日 第1回運営委員会</p> <p>25日 基盤研究 文理連携プロジェクト研究会「医学史と生命科学論」 Pursuing Global Health:Where Medicine Meets Social Science,Humanities, and Engineering Psychiatry and Transboundary Anxiety in Modern Japan</p> <p>28日 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第10回</p>
7	<p>6日 HAPP企画「日吉音楽祭 2019: コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー室内アンサンブル演奏会 ～ジョバンニ・レグレンツィの音楽～」</p> <p>13日 HAPP企画「日吉音楽祭 2019: コレギウム・ムジクム・オペラプロジェクト 2019 プロモーション演奏会 ～ミニオペラ、ドメニコ・チマローザ作曲《宮廷楽長》～」</p> <p>23日 第2回所長・副所長会議</p> <p>25日 基盤研究講演会 no.4 「教養」としての『百科全書』—共時性の中の文化と知識</p> <p>30日 読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第6回</p>
8	<p>1日 第2回コーディネート・オフィス会議</p> <p>1日 庄内セミナー参加者事前説明会</p> <p>2日 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第11回</p> <p>3日 学会・ワークショップ等開催支援「日本ロシア語教育研究会 サマーセミナー『持続可能性言語教育の可能性』」</p> <p>12日～17日 身体知授業</p> <p>29日～9月1日 第10回庄内セミナー</p>
9	<p>3日 第2回運営委員会</p> <p>11～12日 学会・ワークショップ等開催支援「日本体育学会第70回大会 公開シンポジウム&amp;講演会」</p> <p>12日 第3回所長・副所長会議</p> <p>25日 読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第7回</p> <p>28日、10月19日、11月2日 実験授業支援「機械(マシン)と学ぶ『くずし字』(はじめの一步)」</p> <p>28日～11月30日 日吉キャンパス公開講座 出口戦略とその先の未来</p>

Date		Events
10	4日	読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第12回
	5日	HAPP企画「日吉音楽祭2019：室内楽・ピアノマラソンコンサート」
	8日	基盤研究 文理接続プロジェクト研究会「医学史と生命科学論」 医療費の増加と医療の経済評価
	11日～12月11日	HAPP企画「慶應義塾南三陸プロジェクト活動報告（2011～現在）」
	23日	第二十六弾「研究の現場から」石川 学
	24日	学会・ワークショップ等開催支援「日本・フィンランド外交100周年記念 映画『東方の記憶』レクチャー付上映会」 第4回所長・副所長会議
	25日	HAPP企画「出雲大社の建築に見る古代観 - 近世人の夢見た古代出雲 -」
	26日	HAPP企画「Keio Refugee Week 2019：『難民問題』を観る、聴く、考える」
	28日～11月15日	第5回情報の教養学「ビットコインの設計と通貨の新時代」
	30日	映画上映会「私はワタシ～over the rainbow～」
31日	中国の宝塚・越劇——実演と解説〈教養の一貫教育 Vol.2〉	
11	5日	基盤研究 文理接続プロジェクト研究会「医学史と生命科学論」 『フランケンシュタイン』とシェリーの天才論
	6日	第6回情報の教養学「インターネット企業におけるデータとAIの作り方、使い方」
	8日	読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第13回
	14日	第3回コーディネート・オフィス会議
	19日	第5回所長・副所長会議
	22日	第3回運営委員会
26日・27日	舞踏家・雪雄子による身体表現ワークショップ〈教養の一貫教育 Vol.3〉	
12	1日・8日・14日	コレgium・ムジクム・オペラプロジェクト2019 フィガロの結婚
	4日	読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第8回
	8日	学会・ワークショップ等開催支援「シンポジウム いるとどりの『家族のかたち』～パートナーシップと多様な“幸せ”について考えよう～」
	11日	第二十七弾「研究の現場から」ジョナサン・デイル
	17日	基盤研究 文理接続プロジェクト研究会「医学史と生命科学論」 「日本イデオロギー」としての科学技術—日本ファシズムにおける「文系」と「理系」の混淆の仕方についてのイントロダクション
20日	読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第14回(最終回)	
21日	学会・ワークショップ等開催支援「第4回意匠学会デザイン史分科会/ウィリアム・モリス研究会」	
1	12日	学会・ワークショップ等開催支援「公開シンポジウム『交通と文学：鉄道の時代としての19世紀』」
	15日	基盤研究講演会 no.5 アート：見えないものを見る
	15日	コレgium・ムジクム・オーケストラ演奏会 ベートーヴェン生誕250年記念演奏会
	18日	コレgium・ムジクム・古楽アカデミー・オーケストラ演奏会 ～音楽で出会う諸国の人々～
	22日	読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第9回(最終回)
26日	学会・ワークショップ等開催支援「Contemplative Theatre Workshop —内観とシアターワークを取り入れた身体知教育の実践—」	
28日	第6回所長・副所長会議	
2	6日	極東証券寄附講座 アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション
	7日	コレgium・ムジクム・アカデミー声楽アンサンブル演奏会 ～3つの世紀の合唱曲で綴る 音楽と平和～
	8日	学会・ワークショップ等開催支援「シンポジウム『マシンと読むくずし字—デジタル翻刻の未来像』」
26日	第4回コーディネート・オフィス会議	
3	10日	第4回運営委員会
	26日	第7回所長・副所長会議

---

慶應義塾大学教養研究センター  
2019年度 活動報告書

---

2020年8月31日発行  
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター  
代表者 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-566-1151

Email [lib-arts@adst.keio.ac.jp](mailto:lib-arts@adst.keio.ac.jp)

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

印刷・製本 サンパートナーズ(株)

---

©2019 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

ISBN978-4-903248-59-2

Keio University



**慶應義塾大学教養研究センター**

Keio Research Center for the Liberal Arts